
誰か私に平穩を！！

薔薇石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰か私に平穩を！！

【Nコード】

N0299U

【作者名】

薔薇石

【あらすじ】

いたって普通の女子高生である私、神代弥生は平凡な日常を送っていたし、これからも変わらないと思っていた。…あの日までは。てか、魔法て何？私に関わらないで！！！！

「誰か私に平穩を please！！」

【第1章】

・1日目 私の平穏な日常（前書き）

いろいろな意味でごめんなさい。

こんなので読んでくだされば光栄です（／＼／＼）

『くびりりりりり』

朝っぱらから五月蠅いなあ。人が安らかに寝ているというのに。まだ眠いんだよ、寝足りないんだよ。

と、私は寝惚けた頭で考えながら“かちっ”と目覚まし時計を止める。

これで誰も私の安眠を妨害するものはなくなった。

二度寝だ二度寝

……ん？

そういえば今日は何曜日だったけな？

そもそも私が寝足りないのは昨夜、週明けに提出の課題を一気に処理したからだったよーな…

「あああああ！……！！」

しまった！……！！

「遅刻する……！！！！」

今日は月曜日。当然学校もある。そして、私の遅刻は確実だった。

教室に全速力で飛び込んだ私に教室中から視線が突き刺さる。
そりゃあグサグサとだ。

「…あは ちょーっと遅れちゃったかなあ？」

特に剣呑な視線を私に向ける担任（性別： 、年齢：三十路に差し掛かっている）にむかって、私は必殺【笑って誤魔化す】を使ってみるが、担任の顔は無表情のままである。

…怖っ！めっちゃ怖い！！

「また、遅刻ですか。神代さん…」

私が冷や汗を流していると担任は口を開いた。
そして、何もかも諦めたかのような口調で席につくように促す。

そんな感じで私、遅刻常習犯こと神代弥生の日常は今日も変わり
はない…はずだった。

【第1章】

・1日目 私の平穏な日常（後書き）

そのうちにファンタジー要素を含む内容になる…はずです。

1日目 非日常の手前

現在、放課後。窓の向こうからは部活中のサッカー部や野球部やらが見える。ほとんどの生徒が今頃は部活という名の青春を送っているだろう。

そして、私の手元には原稿用紙が五枚も。…五枚も！

一応いっておくが、私は別に文芸部に入っているわけではない。むしろ、何の部活動にも所属していない。いわゆる帰宅部ってやつだ。にも関わらず、なぜ私が放課後の教室で机に向かっているのかという…

『反応文』である。何にたいしてかと、今朝の遅刻のだ。私の目覚めは悪いため、よく遅刻してしまっていたのだが、とうとう遅刻常習犯の肩書きをもらってしまった。オマケに『反省文』というプレゼントまで贈られてしまった…。

「もう無理ー！ー！」

と、叫んで私がなんとかかんとか書ききった五枚の原稿用紙に突っ伏した。もう限界だ…

「あら、意外と早かったわね。ご苦労様」

目の前に気づいたら、担任が立っていてこちらを見ていた。

「うー…先生、帰っていいですかあ？」

我ながら情けない声でたずねると、担任は目を細めてこう言った。

「あなたが私のフルネームを完璧に言えば帰ってもいいわよ？神代さん？」

私の記憶力は残念なのだ。

結論からいうと私は担任の名前を覚えていなかった。

私の反応をみた担任は見るものをゾツとさせる笑顔を浮かべて、今年度二回目にあたると思われる自己紹介してくれた。

「私立桜ヶ丘高校、一年四組担任“加賀美あかね”よ。担任教師の名前くらい覚えてくださいな。神代さん？」

以上、回想。

現在、私は自宅のリビングにあるソファーに寝っ転がって今日の一日を遡っていたのだった。

ちなみに私は一人暮らしをしてたりする。友達からはよく羨ましがられるけど、実際は面倒だ。家事を全て一人でこなさなくてはいけないので疲れる。

両親は三年前に他界した。当時中1の私の記憶力はやはり残念だったため、あまり覚えてないのだが、事故だったらしい。親戚とかについては全くわからないし、どうなっているのか不明。そう考えると、よく今まで生活してこれたよなあと改めて思ってみたり。

まあ、そんなかんじで今日に至るわけだ。

…いかん。柄にもなくしんみりしてしまった。

ポーツとしてると睡魔が襲ってきた。ので、無駄な抵抗はやめて寝よう。

おやすみ…。

『
』

携帯の着信で私が目を覚ましたのは日付が変わってすぐのことだった。

こつという時はすぐ目が覚めるんだから不思議だ。

携帯をみてみると、メールが大量に届いていた。

…なんだ？

そんな私の疑問はメールの内容をみて解消された。

【誕生日おめでとうメール】だったのだった。素直に嬉しいと思う私。というか自分の誕生日を私はわすれていたのか。とんだ記憶力だな。

「…今日で16歳か。」

そう呟いて私はもう一度眠りについた。

次に起きたとき、私の日常は非日常に変わるとは知らずに。

1 日目 非日常の手前（後書き）

やっぱり駄文の羅列にしかありません…。

文才が欲しい）（

2日目・朝 おかしな手紙（前書き）

本日三回目の投稿（苦笑）

やっぱり駄文ですが、初投稿なので大目に見てくださると嬉しいです。

2日目・朝 おかしな手紙

時計をみたら、6時前だった。いや、18時の方ではなくて朝の6時前だからね？

もしかしたら、これも夢なのだろうか…。

私が目覚ましよりも早く、自然に目を覚ますなんてもはや奇跡！それとも1つ大人になって早起きのスキルを身につけた？

そんなことはともかく、今日は遅刻して教室中の視線を浴びることも、担任：加賀美先生の冷めた視線もくらわなくてもすみそうだとということがわかって何よりだった。

余裕たっぷりで優雅に朝食を頂いても時間に余裕があったので、いつもなら夜に読む朝刊を読もうと思いついて郵便受けへと足をむける。

すると、郵便受けには朝刊と一緒に一通の手紙も入っていた。宛名には“神代弥生様”と書かれていて、差出人の名前は封筒には記されていないようだ。

今時手紙？

私は手紙派の人が聞けば怒りを買いそうな現代っ子な考えを思い浮かべながら玄関先で手紙の封をあける。

そこには私の単純な脳味噌では理解しがたい内容が書かれていた。

《神代弥生様

おめでとうございます。 貴女は無事に16歳の誕生日を迎えられましたため、本日を持って『魔法使いによる魔法使いのための魔法使い育成プログラム』へ参加できる権利を得ました。

なお、この手紙を受け取ってから24時間以内に貴女につく指導担当者が参りますので、詳細は後ほど指導担当者へお尋ねください。

魔法使い管理委員会》

…新手のいたずらか何かだろうか。意味わかんないんだけど。魔法使い？

なにその非科学的な単語？だいたいネーミングがダサっ!？

「まあ、害は無さそうだし無視しときゃいつか。」

そう思って、私はその後、学校へと向かったのだった。

2日目・朝 おかしな手紙（後書き）

なんていうか、本当に読んでくださる方、感謝です！！

2日目・昼 非日常へのカウントダウン（前書き）

読んでくださっている方、本っ当に感謝です（〇<―>）

短いし、やっぱり駄文ですがよろしくお願いします。

2日目・昼 非日常へのカウントダウン

今日は余裕で間に合った

と、上機嫌で教室に向かったところまではいいとして

なんで遅刻してないのに私が教室に入ったとたん、みんなして振り向くんだろうか…。

しかも「神代が来たぞ!?!」「あの時計壊れてんのか?」とか、全部聞こえてるんだけど。いくら遅刻常習犯だからって失礼じゃないかな!?

なんだか自分のテンションが急降下していくのがよくわかった。ふふふ…、私はそういう風に見られてたんだね。よくわかったよ。と、ネガティブモードに入りかけた私は加賀美先生が教室に入ってきたことでなんとか持ち直した。

が、次の先生の言葉が私にとどめを刺した。

「出席を確認します。…ええと、いつもどおり神代さんは遅刻で、後は全員来てますね」

ちよっ!

待て待てまで!!

「神代弥生は登校してます!?!」

私が思わず立ち上がると、先生は出席簿から顔を上げて目を丸くした。

「珍しいこともあるんですね。…災いかなにかの前触れかしら」

「先生。その発言は人権侵害の恐れがあります。即刻、謝罪を要求します！」

ていつか、あの先生が目を丸くしたところなんて初めてみたんだけど。

一応確認しとくけど、私は毎日毎日遅刻してるわけではない。たまたま、最近連日のように遅刻してしまっただけなんだけど。

結局、教室中の視線を浴びた上に、加賀美先生からは滅多にお目にかかれないレアな顔を向けられ、わたしの朝はほぼ日常と変わらなかったのだった。

なんか今日はやけに疲れた気がする。…放課後までがやけに長く感じましたよ。

さて、我が家に帰ろう。

そうして、帰路につく私を校舎から見下ろす影があったことに私は当然、きづいていなかった。

ましてや、家に帰りついてから今日一番のトラブルがやってくるな

んで、これっぽっちも思っではいなかった。

そして、夜。

私の平凡で平穩極まりない毎日が急変してしまつまで、時間は僅かしか残されていなかった。

思えば、朝、あのおかしな手紙を開けたときからカウントダウンは既に始まっていたのかもしれない。

2日目・昼 非日常へのカウントダウン（後書き）

明日は文化祭の振替休日なので、明日も更新頑張ります！

2日目・夜 不法侵入者

私は夢をみているらしい。

そうでなければ、とうとう私の頭がおかしくなってしまったに違いない。

だって…

目の前で科学的にはおよそ説明がつかないような光景が展開されているんだもん！？

いや、いや、いや、本当に意味わかんないし！

ドッキリかなにか？いや、それにしても異常だ。

…落ち着け！落ち着くんだ私！！こういうときは現在の状況をできるだけ詳しく正確に把握することが大事だ！

私はなんとかパニックになった自身を落ち着かせることに成功したようだった。

えーと…

現在、23時48分。

場所は自宅のリビングで、私はテレビを観ながら宿題に勤しんでいたところ、いきなり部屋の隅に放置してあった、デカくてボロい姿見が“光り出した”のだ。

しかも、光っているだけじゃなくてこうして状況整理している間に、鏡から人が現れた!?

「あ、あのー…。なんだかよくわかんないですけど不法侵入ですので出ていってください。」

私がおそろおそろ、鏡から出てきた人物に声をかけると相手はいきなり笑い出した。

…なんなんだ…頭おかしいんじゃないか？

『あはははは

貴女いいわねえ…面白い。』

そう言って、顔を上げた不法侵入者の瞳は淡い青色をしていて思わ

ず凝視してしまった。というか、不法侵入者の姿はこの日本という国ではお目にかかれなような異様な格好をしている。

先程、凝視してしまったように碧眼だし、髪も黒とか茶色ではなく瞳と同様に青色である。肌は紫外線なんて浴びたことありません、とばかりに真っ白で透明感があるし、顔立ちは整っていてスタイルもよさそうだ。つまり、美人さんである。いや、体型については特徴的な純白のローブ（ ）だと思う。を身に付けているため、よくわからないが。

私が黙っていると美人さんが口を開いた。

『ふふふ、意外と冷静なのね。遅刻常習犯とかいうから頭が残念なドジっ子か天然娘を想像してたんだけど。』

ん？

なんか今侮辱されたような…？

『こんな愉快的気分になったのは久しぶりだわ。…いいわ気に入った。』

私が貴女を一流の魔法使いに教育してあげましょう。』

は？

ナニッテルンデスカ？

私の脳の処理能力が限界に達したらしく、ただ呆然と美人さんを見つめると、美人さんが何やら説明をはじめた。

『私の名前は“サファイア・マル・ミラージュ”。

魔法使い管理委員会から派遣された、神代弥生担当指導者よ。親しみを込めてサファイア様と呼びなさい』

22

魔法使い管理委員会…

どこかで聞いたような？

私が首を傾げていると

『…通達が届いているでしょ？』

と、ダイニングテーブルの上に放置されている今朝のおかしな手紙を指差す。

てことは、あの手紙はマジだったわけか…

いや、なに納得しそうになってんの？

魔法とか魔法使いとかファンタジーな話、あり得ないって！

私の気持ちが態度にでてしまったのか、彼女、サファイアは口元に笑みをうかべながら言った。

『信じられないみたいね…、なら、見せてあげるわ』

サファイアがいきなりどこからともなく、立派な杖を取り出して、杖を掲げた瞬間、

「…嘘っ！」

目の前に巨大な水の柱が現れた!?

『さて、まあこんなもんで信じてくれたかしら?』

どつやら私は今までの平凡で平穩な日常を永遠に失うことになりそ
うだった…

2日目・夜 不法侵入者（後書き）

読んでくださっている方ありがとうございます。

2日目・深夜 素質と資格

『まずはじめに訊くけど、貴女が“魔法使い”ってきいて思い浮かべるのは何かしら？』

そりゃ、科学的には不可能なことを意味のわからない呪文とか秘密アイテムを使っただけで起こす、ファンタジーの王道的存在かな？

『じゃあ、自分が魔法使いに成る資格があるって言われたらどう思う？』

あり得ない。悪質な冗談、もしくは嘘。

『“魔法使いによる魔法使いのための魔法使い育成プログラム”っていうのは、魔法使いに成れる素質を持った子を、プロの魔法使いが個別について指導して、プロの魔法使いに育て上げる…というプログラムのことなんだけど。』

ソファアに座ったサファイアは私に質問をしたり、説明をしたりと大忙しだった。

「……へー。」

「そりゃスゴいですねー。」

「でも、そんなプログラムの案内がなんで私のところに？」

私は平凡極まりない、ただの女子高生ですよ、魔法使いとか無理ですよ。

私がそうきくと、サファイアは真面目な顔をして言った。

『それは、貴女が魔法使いに成る資格を持っているからよ。』

「……………」

嘘だ。絶対に嘘だ。

そんな資格は物語の中の主人公だけで十分だ。

『嘘じゃないわよ。』

「アンタは人の心が読めんのかよ!？」

思わず突っ込んでしまった

『読めるわよ　そういう魔法があるもの』

しかも本当に心が読めるらしい。なんかなんでもありだな…

「それよりも、どういう意味なの？私に魔法使いに成る資格があるなんて…」

『意味も何も、本当のことよ。貴女は魔法が使えるのよ。…まあ、魔法を使うのには手順がいろいろ必要で、私はそれを貴女に教え、サポートするのが役目なんだけどね？』

そういうと、サファイアは私の目をじっと見つめて私に問う。

『一応確認しとくけど、神代弥生、貴女はプログラムを受けるわよね？』

私はサファイアの問いに対して「考えさせて」と、返した。

いや、さんざん魔法とか魔法使いをファンタジー要素って馬鹿にしたけど、そりゃあ少なからず魔法が使えたらなあ、とか思ったこともあるしね。

正直、魅力的な話だった。

でも、そんなのいきなり言われても簡単には答えなんて出せない。

だから、答えを出すまで待つてもらうことにした。

サファイアはその間、うちに居ることになった。

というのも、サファイアがやって来た場所（おそらく、絶対ファンタジーな世界）へは、なにやら細かな条件を満たしたうえで、来るときに利用した姿見を通ることで行き来が可能らしい。

そして、最低でもその細かな条件というものをクリアするには一週間ほどかかるらしい。要するに、一週間はサファイアは自分の居場所へ帰ることが出来ないらしい。
だから、うちに居ることになったのだ。

幸い、私は一人暮らしだから空き部屋くらい用意できるしね。

にしても、今まではデカくてボロい、ただ邪魔なだけの鏡だと思っただけで、異世界への扉だなんて、認識を改める必要がありそうだ。

「はあ…」

私はため息をつくどベッドに寝転んで、瞼を閉じた。

まだまだ疑問は山積みだけど、いろいろあつて疲れたしらとりあえず今日は寝よう。

こうして、夜はふけていくのであった。

3日目 いつも通りと視線（前書き）

遅くなってしまいました。

相変わらずの駄文ですが読んでいただけるとのなら光栄の至りです！

3日目 いつも通りと視線

『くびりりりりり』

…五月蠅いな、あと五分したら起きるから今は寝かせて…。

そう思って目覚まし時計を止めると、いつも通りに二度寝しようとした私。だが、そのあとはいつもと違っていた。

『目覚まし時計だか、なんだか知らないけど、ソレ五月蠅いのよ。ていうか、さっさと起きなさい』

そんなセリフと共に頬にペチっと、平手打ちを喰らい、私は文字通り叩き起こされるはめになったのだ。

寝惚けた私の目に映ったのは、青色をした美人。サファイアだった。

とりあえず、昨夜のことは全部夢でした…なんていうオチではなかったみたいだ。

私が食卓に着くと、サファイアは既に座っていて、すました顔で紅茶をのんでいた。

「トーストくらいだったら用意できるけど、食べる？」

私がかきくと、サファイアは首を横にふり、パチンと指を鳴らしてみせる。

『トーストなら遠慮するわ。私はこれを戴くから』

そういつて、目の前に突如現れた豪華な朝食を指差す。

…なんか腹立つな…。

ふん、朝からあんなに食べたなら太るんだから。

私はチラチラと横目でサファイアの朝食を見ながら自分はトーストをかじってそんな風に考えて、気にしないことにした。

別に、「魔法で出せるんだったら、私の分も出してくれればいいのに」とか思っていない。

…思っていないって！

と、いつもとは違う朝を過ごしているうちに時間も進んでいるわけ
で…

「やばいっ！走らないと間に合わないかも…」

気が付けば、私は遅刻するかもしれない瀬戸際だった。

「ぎりセーフ!!」

私が教室に駆け込むと、教室中の視線が…（以下略）

まあ、いつも通りの反応ってことだ。

先生の反応も、相変わらずだった…。

なんかもう、いろいろと諦めた瞬間である。

ただ、ここで私は一つ勘違いをしていたのだが、この時点では気づいてはいなかった。

なんか視線を感じる気がする。

そう思ったのは本日最後の授業が終わる間近だった。

そして一度気が付けば、朝から誰に見られていたこともすぐにわかった。

私は視線に気がつかないフリをしながら、視線の持ち主を探す。

そして、授業が終わるのを見計らい、その人物に放課後、話がしたいと、呼び出すことにしたのだった。

放課後、私たちの教室に残っていたのは、私と視線の持ち主だけだった。

「……………」

沈黙が気まずい…。

でも、なんて切り出せばいいんだろう。

もし視線をおくっていたのが私の勘違いとかだったらアレだし…。

沈黙を耐えきれなかったのは、向こうも同じだったらしく

「話ってなァーにー？」

弥生ちゃん」

と、しびれを切らしたらしい相手が話し出してきた。

「いや、えっと…」

私は言葉を濁して相手の顔を伺うように見る。

「もしかしてー、璃梨が朝から弥生ちゃんのこと、ずーっと見てたからかなー？」

そう言言って彼女は言葉をさらに続ける。

「そーいえばー、弥生ちゃんて、この間の誕生日で16歳になったんだよねー？
はっぴーばーすでい

16歳の、誕生日ね…。

…弥生ちゃんは、魔法使いになるのかな？？

それとも、そんなのお断り？

だったら勿体無いなー、弥生ちゃんならかなり上までいけると思っただけど…

あつ。まだ詳しいことを教えてもらってないの？

じゃあ担当者に聞くといいよー」

「！」

そんな言葉と共に、口元に笑みを浮かべる少女、あきぐちりり秋口璃梨は私に言った。

「私、魔法使いなの。」

そういえば、彼女も16歳を迎えていたことを思い出した。

3日目 いつも通りと視線（後書き）

読んでくださって本当にありがとうございます！

3日目・？ 決意（前書き）

読んでくださってる方へ感謝ですm（
）m

3日目・？ 決意

秋口璃梨について私が知っていることといたら、彼女が一見可愛らしい女の子にみえて、結構ひねくれた性格をした人間であるということ。

そして、容赦がなく、優しさという言葉を知らない女であるということだ。

語尾をのばす特徴的な

話し方は、いちいち気にさわるし、確実にあつちはそれをわかっている。

彼女の言葉には必ず裏があり、彼女の行動の裏には必ずなにかしらの企みがある。

そして、彼女は他人の迷惑なんてお構いなしで、黒い考えを言葉を巧みに操り、読めない行動で相手を惑わし実行する。

璃梨の趣味は、もはや他人への嫌がらせといっても過言ではない。

そんな、悪魔の化身ともいえるような女、璃梨とは犬猿の仲であり、それも小学校から続くものである。

彼女と私の腐れ縁は、9年前。つまりは小学校の入学式からで、彼女と初めて関わってしまったのは、は小学三年生になって初めて同じクラスになってからだだった。

その後、彼女とは現在に至るまで腐れ縁を断ち切ることが出来ずにいるわけだが…

今日、彼女についての情報が一つ追加された。

それもかなり厄介な情報が。

魔法使い である、ということだ。

『へえ、貴女の周りに魔法使いがねえ。』

家に帰った私は、サファイアに璃梨について話した。璃梨は、自分が魔法使いだということをカミングアウトすると、用は済んだとばかりにさっさと帰ってしまい、それ以上のことは聞き出せなかった。

『それにしても、その娘はなんでカミングアウトしたのかしらね？』

「…？」

『まだ貴女はプログラムを受ける意思を表示していないもの。立場的には、いわゆる一般人。一般人に魔法使いであることを話すなんて…』

サファイアがなにやら呟いたが、私にはよく聞こえなかった。なんていってんのさ？

そして、私は璃梨の衝撃告白をきいた時から考えていたことをサファイアに言おうと意を決した。

「サファイア」

『ん？何かしら、急に真面目な顔をしちゃって』

「私、プログラム受けることにしたよ」

『…随分とあっさりね』

サファイアが少し驚いたような顔をしている。

まあ、すぐには決めれないから返事を待ってほしいとか言っていた人間が結論を出すには早い決断であろう。

だが、秋口璃梨が私に自分が魔法使いだということを告げたのには、何か絶対に裏があると思う。というか、絶対なにかたくらんでるとしか思えない。

だから、私も、璃梨が何かやかしたときに対処できるように、そして璃梨に対する牽制の意味も込めて、私も魔法を使えたほうが良いだろうという考えである。

『…わかったわ。では改めてよろしくね。弥生』

呼び方が“貴女”から“弥生”に変わったらしい。

…ここまで来たらもう一般人には戻れないのだろうなど、頭の片隅で考えながら、私もサファイアに言った。

「よろしくね。サファイア」

『まずは、魔法使いや魔法についての知識をつけてもらわないとね。実践はそのあとよ』

サファイアはそう言って、分厚い本を取り出した。

『手始めに、魔法使い管理委員会への登録を実際にやってみてもらわないとね』

「登録？」

私が首を傾げると、サファイアは手に持ったままの分厚い本を私に渡してきた。

『そう、登録よ。』

魔法使い管理委員会に登録しなくちゃ魔法を使ってはいけない決まりなの。

じゃあ、私が今から言うことを復唱して頂戴』

「わかった」

よくわかんないけど、とりあえずサファイアに従つてごう。

『我、 齡16を迎えた資格保持者なり』

「我、 齡16を迎えた資格保持者なり」

『資格に基づき、ここに魔法を志すことを誓う』

「資格に基づき、ここに魔法を志すことを誓う」

『魔法使い管理委員会の名簿に我、神代弥生の名を刻みたまえ』

「魔法使い管理委員会の名簿に我、神代弥生の名を刻みたまえ」

なんだか堅苦しくて長つたらしい呪文(?)を唱えると、手元の本が輝きはじめて白い光が私を包み始める。

「!?!?」

『ふむ。上手くいったみたいね』

べつやら上手くいったらしい。

…でも、本当に私に魔法なんて使えるのだろうか。かなり不安だ。

「サファイア、今のはなんだったの？」

「ん？」

これは、魔法使い管理委員会への登録作業よ。

なんていうか、偉い人の趣味で儀式めいてるせいか、やたらと呪文唱えないといけないから面倒なのよね…

はん。何が伝統的な方法なんだか」

なんだか魔法使いにも偉い人への不満というものはあるらしい。ていうかサファイア、顔が怖いですよ！。

『さてと。善は急げというし、早速 サファイアの魔法特別講座―知識編― を始めるわよ！』

こうして、私はこの日から魔法使いの肩書きを得たのだった。

だが、サファイアも私もこの時は知るよしもなかったのだ。

魔法のあふれるファンタジーな世界を揺るがしかねない事件へと巻き込まれることを。

3日目・？ サファイアの魔法特別講座

サファイアの魔法特別講座―知識編―

『さて、まずは魔法使いの社会についてです。

魔法使いは、原則として魔法使い管理委員会に登録しなくてはいけません。

魔法使い管理委員会に登録しないで魔法を使用することは禁止されています。

もしも登録なしに魔法を使用した場合は厳しい罰が与えられます。

…ここまでで何か質問はあるかしら？』

「厳しい罰って??」

火炙りの刑とかだったりして。

『使用した魔法のランクによるわ。一週間、タダ働きっていう小さなものから、最悪の場合は死刑ね』

「…ランク？魔法にランクなんてあるの??」

「ええ。」

魔法には大きく十段階のランクわけがしてあるわ。当然、ランクが上になればなるほど高度な技術と膨大な魔力が必要よ。

魔法だけでなく、魔法使いにもランクがあるわよ』

…なんか嫌だなあ。

ランクとか低いに決まってるし。

『魔法使いのランクも十段階で、“星”の数であらわされるの。

はじめは 清き純白 と言われる白い星で。

そして、次に 麗しき漆黒 と呼ばれる黒い星の5つずつでね。

それぞれ、“ ”と“ ”であらわされるわ。』

ふむふむ。

『魔法使い管理委員会に登録した当初は“星なし”、つまりランク外になつてゐるから、ランクを得たり上げたりするには委員会主催の昇格試験を受けなくてはいけないの。』

ランクがあがれば待遇もよくなるわ』

試験…！？

魔法使いになつても試験を受けないといけないの！？

「えつとね…」

試験でどんな？」

『魔法の実技試験よ』

実技い？この場合まだ、筆記試験じゃないぶんよかったと思うべきなのだろうか…

『まあ、他にも細かい決まりとか知っておくべきことは沢山あるんだけど、今のところはこのくらいの知識があれば十分ね。』

一度に言われても困るだろうし、必要な知識は、そのつど教えてあげるから。』

サファイアはそこで一旦締めくくって、私に言った。

『あと5日ほどで、あちらの世界に繋がるから、その時に試験を受けましょう』

あと5日で！？

いきなりすぎるでしょ！！てか、無理だっ！

無茶ぶりしすぎだっ！

「そんなこと言われても、私まだ魔法使ったことないし、教わってないし…」

私の様子を見てサファイアが笑った。

…なんか嫌な予感。

『大丈夫よ。今から魔法について教えてあげるから。少々きついかもしれないけど5日あれば“ ” 2つくらいは取れるようにしてあげるから』

そう言うサファイアは黒い笑みを浮かべていた。

「いやいやいや。私、サファイアみたいに立派な杖とか持ってないしさあ」

そうだ。そんなアイテムは持ってないから魔法なんて無理だ。

『ああ、説明がまだだったわね。別にアイテムは必ず必要な訳じゃないわよ』

アイテムはあくまで補助。

ほら、私が朝食を出したときには杖使ってたでしよ？

それに比べて、最初に私が魔法を使ったときは被害を出さないように威力を調節するために魔力を抑えなくちゃいけないくて杖を使ったけど』

「…??？」

まだ理解しきれないでいる私を見て、サファイアはさらに続けた。

『基本的にアイテムを使うのは自分の技術や魔力を補うために使うってわけ。』

自分の技術や魔力で十分ならアイテムはいらないのよ

呪文も同じ原理よ』

ああ、委員会に登録するときのは別だけどね、とサファイアは言った。

「ふーん。

でも、私にはやっぱり…」

無理、と続けようとしたとき、サファイアが私の言葉を遮った。

『さてと、まずは何から始めようかしらね』

『まずは、初歩の初歩からね』

当たり前です。

というか、初歩の初歩でもできるかわかんないんだし。

『いい？』

重要なのはイメージよ、イメージ。』

イメージねえ…

『この蠟燭に火をつけるところを想像してみて』

そういうと、どこから取り出した蠟燭を机にのせてサファイアが言った

えっと、火がつくイメージ？

「……」

なんにも起こらないんだけど。

…なんか悔しい。こうなったらなにがなんでも火をつけてやる！

火よつけ。

燃えろ、燃えろ、燃えろ、燃えろ、燃えろ！！

「……」

『えっと。そうね、きつと疲れてるのよ。うん、また明日やりましょうか』

サファイアが言った。

てか、私、本当に初歩の初歩もできないんだ…。

何気にショックをうけたよ。

こうして私の魔法修行一日目は失敗に終わった。

3日目・？ サファイアの魔法特別講座（後書き）

読んでくださってありがとうございます（／＼／＼／＼）

6日目 異常発生(前書き)

なんか、いきなり内容がすすんで(？)ます。

こんなので読んで下されば嬉しいです。+。*、(

6日目 異常発生

今日は、魔法修行を初めて4日目。つまり、明日で5日目である。それにも関わらずあいかわらず駄目な私。

そのため、苦手な早起きをして朝練をしている最中である。それでも駄目って…

いや、ね？サファイアはいろいろと熱心に教えてくれるんだけど、やっぱり私には魔法なんて無理ってことじゃないかな…。

『うーん。確かに魔力は感じるんだけどねえ。何がいけないのかしら』

サファイアも首を傾げている。

『何が原因かわかればすぐに魔法を扱えるようになるはずなんだけど。』

その原因がわからないことにはね…』

「じゃあ、学校行ってくるね…」

そろそろ登校しなければいけない時間が近づいたため、鞆を手に取りながらサファイアに告げた。

『いつてらっしやい』

「いつてきます」

教室に入ると、また今日もクラス中の視線を…浴びることはなかった。

「あれ？なんでみんないないの??」

そう、クラスにはいつもならクラスメイトがすでに登校しているはずなのだが、今日は誰もいなかった。

私は慌てて他の教室も見て回る。しかし…

「なんなのよ一体…」

校内をくまなく見て回ったが誰一人として見つからなかった。

最初はもしかしたら、私が知らなかっただけで今日は学校は休みだから誰もいないのではないかと思った。

でも、冷静に教室を見渡して見ると、不自然な点が幾つかある。

まず、靴箱にはみんなの“外靴”が入っていて、“スリッパ”がな

いこと。
そして、教室に残された鞆。

この2つから、みんなは学校へ来たことがわかる。

さらにおかしな点がある。

教室内の机や椅子が倒れていて、床には教科書やノート、筆記用具が無惨に散らばっているのだ。
まるで、何かに荒らされたかのように…

「本当になんなのよ！
誰か私に説明してよ！！」

何！？

この学校で何が起っているのよ！！

「あ。弥生ちゃん、やっと来たんだー。もう、遅刻しちゃ駄目じゃーん」

「！？」

この声は…

まさか

「弥生ちゃんがい、なかなか来ないからあ、校内を掃除しおわっちゃったんだからあー」

振り向くと、にこやかな笑みを浮かべた秋口璃梨が立っていた。

「あなた…」

「一体、みんなに何をしたのよ!？」

私が璃梨を睨み付けても璃梨は笑顔を浮かべたままだった。

「だからあ、掃除っていったじゃん？」

私かね、魔法つて本当にあるんだよーって、教えてあげても、だあーれも信じてくれないんだもん。

だから、目の前で見せてあげたのに、今度は化け物扱い。

本当、クズばっかよねえ。

私はともかく、魔法使いを侮辱するなんて、“あの方”まで侮辱したも同然。

そんな奴ら、生きててもしょうがないと思わない？

弥生ちゃんならわかるでしょ？」

「狂ってるよ、あんた！

おかしいんじゃない？

みんなは？

無事なんでしょうね！？」

私の知る、秋口璃梨は少なくとも、常識の通じるまともな人間だった。

他人を弄んで、喜んでる悪趣味な奴ではあつたし、嫌がらせばっかしてるような女だったけど。

こんな、こんな奴じゃあなかつた！

何？

本当になんなの？？

一体何が起きてるの？

「…弥生ちゃんはいつらの肩をもつんだねえ。」

そう言った璃梨の顔はもう笑顔を浮かべてはいなかった。

「なら、いいや。」

本当は自分の意思で仲間になってほしかったんだけどなあー。

わかってくれないんだったらあ、力でわからせるしかないみたいだね」

危険だ、と本能が警告している。逃げなきゃって頭ではわかってるのに、足がすくんで体が動かない。

「弥生ちゃん。一緒に遊びましょう」

こつして理解不能な状況の中、私は命の危機にさらされることとなる。

6日目 異常発生（後書き）

璃梨の悪役が確実に

6 日目・？ 真実と謎（前書き）

また、内容がすすみまくって（？）ます。

6 日目・？ 真実と謎

「…どうすればいいの？」

学校から人が消えていて、璃梨がなんだかおかしくなっていて…

もう、魔法とか魔法使いだとかを越えて理解不能だ。

滅茶苦茶すぎる。

「弥生ちゃん、私からいくよー！」

璃梨はそう言って、手を振りかざすと璃梨の身体が光に包まれて、次の瞬間、私の足元から水の渦が発生し、私は飲み込まれそうになる。

「!?!」

私は反射的にその場から離れようとする。

「逃げちゃ、だーめ！」

しかし璃梨がまた魔法を使い、今度は植物のツタのようなものが私にまとわりついて身動きが取れなくなってしまった。

そして…

私は水の渦に巻き込まれた。

私は虚ろな意識の中で、死ぬのかな？と考えていた。

クラスメイトや先生、サファイア、ぼんやりとだが両親の顔を思い出す。

あーあ。短い人生だったな

よりによって璃梨にやられるなんてなあ。

…嫌だ。

なんで私がこんな目にあうの??

この間、16歳になったばかりなのに。

まだ、やりたいことは沢山あるのに。

私は何にもしてないのに!!

私、私は…

「わ、私は、まだ、死にたくー…ないっつ…!!」

そう思った瞬間、身体が熱くなるのを感じる。

水中にいるのに、まるで身体が燃えているようだ。

そして気づいたら、私は驚愕の表情を浮かべた璃梨の上空に浮かんでいた。

「う、嘘でしょ…!!」

なんで!?

これは上級魔法なのに!!

こんな、魔法を習って数日の小娘に私の魔法が破られた?」

璃梨はそう言うと、魔法を使って火柱を生み出した。

しかし

不思議とさっきのような恐怖は感じなかった。

なんだか大丈夫な気がして。

そして火柱は私の目前で散っていった。

「な、なんなの!？」

そんな私を見て璃梨は言う。

「私は、“あっち”で生まれ育ったのよ？」

委員会の馬鹿げたプログラムで数日前に魔法を初めて知ったようなあんに、なんで…なんでよ!!」

「…“あっち”で生まれ育った??」

じゃあなんで、ここに??

それに、私はあんたを9年前から知ってるんだけど？」

璃梨の言葉に私は疑問を覚える。

「ふん、なんで私があんたに教えなきゃいけないのよ」

璃梨が悪態をついて、こちらを睨む。

その直後、この数日で聞き慣れた声が聞こえた。

『私も詳しく聞きたいわね、その話。相当派手にやらかしてくれたみたいだし、魔法管理委員会に所属する身として私には聞く権利があるわ』

「サファイア！」

サファイアの姿を認めて、安心したからか力が抜けるような感覚に襲われ、私の身体は失っていた重力を取り戻して落下していった。

『弥生！！』

間一髪と叫んだところで、サファイアが私を受け止めてくれたため、怪我はない。

『さて、全部話してもらおうよ??』

「そうはいかないよ！」

璃梨は再び手を振りかざすが、それよりもサファイアのほうが早か

った。

『凍結。』

ただサファイアがそう呟いただけなのにも関わらず璃梨の足元が凍りついていたのだ。

「あなた、いきなり出てきて何者よ？名をいいなさいよ」

『名前を尋ねるときには自分から名乗りなさいって習わなかったのかしら。』

しょうがないわね…

私の名はサファイア・マル・ミラージュよ』

「…サファイア・マル・ミラージュ??」

蒼き彗星 って呼ばれてるあの?」「サファイアって凄かったんだね。璃梨の反応的には結構有名人っぽいし。」

「…私は、リリアーナ・フィリップ・トラネスよ」

璃梨、いや、リリアーナがそう言うのと、サファイアはさらに質問をする。

『何が目的なの??』

「…別に…」

『このカラクリを教えてちょうだい。』

あと、一般人は無事なんでしょうね?』

サファイアがきくと、リリアー又は肩をすくめて答える。…話す気になったのだろう。

「生徒も教師も全員無事よ。」

ちよつと気を失ってもらっているだけ。屋上に全員いるわよ?」

屋上?それは盲点だった。でも

みんな無事でよかったよ。

私は内心でほつとしていたがサファイアは質問を続けている。

『秋口璃梨っていうのは貴女が作り上げた架空の人物なのかしら? それで周りの記憶を操作した、とか?』

「いや、秋口璃梨は確かに神代弥生と今から9年前に出会い、ずっと近くにいたよ。ただ、1ヶ月前の雨の日の登校中、交通事故にあつて…」

既に亡くなっている

…けどね。

“あの方”からの命令を実行するのに、秋口璃梨っていう姿になったほうが都合がよかったから、私は彼女としてしばらく過ごしたってわけ」

…秋口璃梨が死んでる？

なんだそれは。

私はそんなこと知らない。

そんな私をリリアーヌが見て言った。

「私が記憶を操作したからね。

まあ、私の魔法を破ったあんたならそろそろ思い出すんじゃない？ 私が秋口璃梨としてあらわれるまでのこととか、彼女が亡くなっていることとか。

はあ。それにしても、計算外というか予想外というか…

確かにあんたから魔力を感じ取ってはいたけど、あんなレベルだとはね……」

あんなレベル……

そういえば

私、魔法使ったの？

『……まあいいわ。続きは委員会で聞いてあげろ』

そうサファイアが告げるが、リリアーヌは笑って言った。

「それは遠慮しておくわ

“助け”が来たみたいだしね」

その瞬間、リリアーヌを光が包み、消えた。

『しまったわ！

助けに来る仲間がいたなんて……』

私は呆然とそれを見ていた。

今日1日でいろんなことがありすぎて頭がパンクしそう。

一体なんだったの？

私が

その答えを知るのは、まだまだ先のことである。

6 目 ・ ？ 真実と謎（後書き）

読んでくださって

本当にありがとうございます（ ）（ ）

7日目・深夜 夢の中で（前書き）

久しぶりの投稿です???

しかも、やっぱり駄文。

内容わかりにくいですが、皆様の読解力に期待をします…

7日目・深夜 夢の中で

「弥生ちゃんってさあ、本当に馬鹿なわけ？」

…誰？

「まったく失礼しちゃうわよ。璃梨はあんなに性格は悪くないんだけどおー？」

りり？

…璃梨って確か…

「にしても弥生ちゃんとの謎の青色美女が偽物をぶっ潰した時は爽快だったわあ…ありがとう。一応礼を言っておくわ」

偽物？ぶっ潰した？青色美女？

なんだろう、何か忘れていることがあるような…

「…まだ思い出せないの？本当、勘弁してよー。」

璃梨だっつてずっとこうしているわけにはいかないんだよお？

秋口璃梨はすでに亡くなっている

んだから」

！…っ!？

そうだ。璃梨はもう…

なんでだろう涙が…

「!？」

泣かれると困るじゃない!

ああ、もう…。

…今までごめんね。璃梨の表も裏も知ってて普通にしてくれたの弥生ちゃんだけだった…

今日はお別れをいいに来たの。

ほら、あなたは あっち に戻りな?

ここに来るのはまだ早いよ…

ばいばい弥生。」

『弥生!？』

意識が戻ったのね!』

目を覚ますと、青色美女…じゃなかった。

サファイアが凄い勢いで駆け寄ってきた。

「…？」

私、あのあとどーしたんだっけ…」

あのあと、すなわち偽物の璃梨との戦いのあとである。

『本当に心配したのよ。』

弥生ったら突然意識不明になっ…』

意識不明？

ふーん。そんなことになってたのか…

「…夢をみたの」

『夢？』

サファイアが怪訝そうな顔をする。

「璃梨が、お別れをいいに來たって…、それで、ここにいるべきじゃない、あっちへ帰れって…」

『…それ、本当？』

サファイアが真剣な表情で聞き返してきた。

「本当だよ。」

璃梨が亡くなっていることも思い出した。

あはは、あの偽物、いま思えば全然似てなかったよ…」

本当、全然似てない。

璃梨はあんな他人が演じてたよりももっと…

人間らしかった。

見えにくいけど、ちゃんと優しかった。

いわゆるツンデレ？

『もし、それが本当だとしたら弥生は死んでもおかしくなかったわよ…』

サファイアが真っ青な顔で私に言う。

って、死！？

私、逝っちゃいかけたの！？センチメンタルな気分も吹っ飛んだよ！！

「な…、なんで？」

『死者に助けられて危機一髪ってところかしら。よかったわね』

ふう、っとサファイアがため息をついた。

『とりあえず、もう少し休んでなさい』

そう言ってサファイアは部屋を出ていった。

にしても、私、死にかけたの？

それを璃梨が助けてくれた？

もう脳の処理能力が限界だ。

パンク寸前。フリーズしちゃう。

「もういや…！」

誰もいない部屋で私は一人呟いた。

7日目・深夜 夢の中で（後書き）

ぐだぐだな文を読んでくださりありがとうございますm () m

番外編 サファイアのため息と謎の影（前書き）

番外編っつーか、予告？

こっぴつ話になるかもなーっていつ？

番外編 サファイアのため息と謎の影

魔法使い管理委員会所属、現在進行中で神代弥生の担当者。

サファイア・マル・ミラージュ。

通称 蒼い彗星

ランク

容姿端麗で魔法使いとしての実力も兼ね備え、世間になの知れた女である。

その女は、考え事をしていた。

『死にかけて、か』

はあー、と深い深いため息をつくサファイア。

『…単純に魔力を限界量以上消費したせいってわけじゃあないみたいだし…、考えられる可能性は…。』

でも、なんで？

それにあの魔力。

駆け付けた時には既に発動し終わってたみたいだけど、あの場に残ってた魔力の気配からすると…。』

そんな悩ましげなサファイアの話をごっそりと聞いていた者がいた。

「ふふふふふ。」

まだ、気付かれてはいないようね…

でも、さすがというべきですか、あの娘 について考えはじめる
とは…」

「まあ、まだ私が貴女達の前に姿を現すのは先のことです。

せいぜい格下の相手に殺られないように精進してください」

「では、ごきげんよう」

「!？」

なに？誰かいた気が…

気のせいかしら。

とにかく、こうなったら早めにあっちの世界に戻らなくては…」

ゆっくりと、しかし着実に物語は進みつつあった。

番外編 サファイアのため息と謎の影（後書き）

読んでくださりありがとうございます m () m

7日目・朝 出発します(前書き)

わー…

1ヶ月くらい放置しちゃってました…(;)!!

相変わらずの駄文ですが、読んでやってくだされば嬉しいですm
——) m

7日目・朝 出発します

その夜は眠れなかった。

戦ったり、死にかけたり、とにかくいろんなことが自分の身に降りかかってきたということまでは理解できた。

もっとも、理解はできても納得はしていないんだけど。

そうこうしているうちに夜も明けてきたらしい。

そういえば今日でサファイアがやって来てから一週間だなあ。

ん？

つてことは、姿見の向こう側の世界に行くのかな？

正直言つて、魔法に関わってから、一度死にかけたりしてることを考えると行きたくない。

でも、そしたら一週間、世話になったサファイアに迷惑をかけちゃうよなあ…。

「やっぱり行くしかない、のかなあ」

そう眩いて私はカーテンを開き、外を見る。

外はすっかり夜も明け、朝日が私の気持ちとは裏腹に眩しいほど輝いていた。

『あら、珍しいわね。弥生が私より先に起きているなんて』

それがリビングで朝食を食べていた私を見たサファイアの第一声だった。

「なんていうかさあ、他に言うことはないの？
普通は、おはようとかじゃないの？」

『弥生が先に朝食をとってる場面は完全に予想外だったのよ』

サファイアはしれっとした顔で言うと、食卓に着く。

「…そういえばさ、今日でサファイアが来てから一週間だよね。

“あっち”にはいつ行く予定なのかな？」

『ん？もちろん、今日よ今日』

私の質問に、サファイアはほぼ即答だった。

って、え？

今日？

今日って言いましたか？この人。

『前に言ったじゃない。』

一週間たったらすぐに“あっち”へ行くって『

サファイアがまるで「まさか忘れてたんじゃないでしょうね」「という顔をする。

あれ？

そんなこと言ってたかなあ？

ほら、私の記憶力って悪いんだよね。

『“あっち”に着いたら、昇格試験を受けに行くとも言ったわよ』

.....。

そういえば、そんなことを言われたことがあったようななかったよ
うな.....。

『とにかく、もう少ししたら行くから、準備しときなさい』

「準備？」

『何か、持っていきたいものがあるのなら準備しなさいってことよ。しばらくは、こっちに帰ってこないんだから』

「こっちに帰ってこない？？」

どーいうこと？

それは聞いたことないと思うんだけど。
初耳だよ、初耳。

『あら？話してなかったかしら？』

…ああ、そういえば

話すのを忘れちゃってたわね』

思い出したように言うサファイア。

つか、話すのを忘れてたって…

『昇格試験に無事、合格したら王立魔法学校<デステイニア学園>

に入学できるのよ。

<デステイニア学園>は、授業料とか高くて庶民には手が届かない憧れの学校。しかし、委員会のプログラムを受けていれば学費免除なの』

なんかいきなり、魔法学校とかいうファンタジーな単語が出てきたよ…。

しかも、なんか説明まで始めちゃったし。

『ちなみに私の母校よ!』

……、授業料は庶民には手が届かないんじゃないの？

つまり、サファイアって金持ち??

「それで、仮に昇格試験を受けて合格したら、その学校へ通えと?」

『ま。そういうことね』

「こっちの学校はどうするのさっ!?!」

ていつか、まさか“あっち”に住めってことじゃないでしょうね。

『うん。その、まさかよ』

「心を読むなっ!」

『まあまあ、落ち着きなさい。』

魔法学校を卒業したら、こっちにも自由に帰ってこれるから』

つまり、卒業するまでは帰れないってことじゃない。
ふざけんなつ。

しかし、

『いや、でもさ、弥生は別にこっちの世界に執着してはいないじゃない』

サファイアのこの言葉に私は固まってしまった。

…？

私が、こっちの世界に執着してはいない？

「や、やだなあ。そんなわけないじゃん」

『…弥生はさあ、心のどこかでは別に“あっち”に住んじやってもいいかなあ、とか思ってるでしょ』

そんなこと…

思ってたんか、ない…はず。

「……………」

黙ってしまった私を見ながら、サファイアはもう一度言った。

『もう少ししたら行くから、準備しときなさい』

準備といっても、衣服や日用品は“あっち”に着いてから、サファイアが買ってくれると言ったので、ほぼ手ぶらでOKだ。

にしても、衣服に日用品まで買ってくれるなんて、サファイアがお金持ちってことは確定したね。

そんなことを考えながら、少ない荷物をまとめる。

ちなみに中身は、現金と両親の形見だけだ。

こちらのお金は“あっち”で、“あっち”の通貨に替えられるらしいので、さつき銀行でおろしてきた。

「…こつちの世界に執着してない、か」

さっき、サファイアが私に向けた言葉を呟く。

いや、別にそんなこと思ってないと思うんだけど…

でも確かに、「別に“あっち”にしばらく住んじやってもいいかなあ」とは少し思った。

…なんていうか、こつち、毎日が平凡で、つまらないなあって感じるのだ。

平和な日常に飽きた、というか。

そんなことを思う反面、昨日のこととかを考えたら、魔法も魔法でアレだよなあ、と思うのは矛盾していると自分でも思うけど。

「まあ、いつか。

期末テスト受けなくてすむし」

私は三日後に迫っていた期末テストのことを考えて、そう結論した。

テストと宿題は学生の敵なのだよ。

『弥生、準備が出来たんだったら早くきなさい』

そんなサファイアの声が聞こえたので、私は少ない荷物を持ってリピングへと向かう。

サファイアは姿見の前にすでにスタンバっていた。

『じゃあ、行くわよ』

こうして、私はついに“あっち”へと足を踏み入れたのだった。

7日目・朝 出発します（後書き）

次から

やっと魔法あふれるファンタジーな世界に突入できそうです！
・
（ b

読んでくださってありがとうございます！

【第2章】

・1日目 素敵、素敵（前書き）

第2章です？

……なんか力尽きました…。

駄文ですが、読んでくださったら嬉しいです。

姿見を通っての移動は、全然、魔法っぽくなかった。

なぜなら、姿見の向こうにはおそらく“あっち”の世界のどこかであるう景色が広がっていて、姿見をくぐっただけで着いてしまったからだ。

うん。

簡単にいうと、ドラえもんに出てくる、どこでもドアをくぐったかんじ。

呪文とか謎の光とか、そういうのは一切なかった。

ちよつとつまんない。

でも…

「すっごーい！」

めっちゃめっちゃ素敵じゃん！」

着いたところは、半端なく素敵なところだった。

海外とか行ったことないけど、ヨーロッパとか行ったらこんなかんじなんだろうなあ、ってかんじ。

道が、コンクリートじゃなくて、石畳ってところが雰囲気でてる。

お店も、現代日本みたいなビルとかじゃなくて、オシャレな外観のお店が一軒一軒並んでる。

とにかく素敵すぎるー！

観光したい、買い物したい、見て回りたい！！

『…弥生でも、そんな風にはしゃいだりするのね』

サファイアが呆れたように言ったけど、気にしない。

きっと、遊園地にはじめて来たちびっこもこんな気持ちなんだろうな。

「見て回りたいたいんだけどっ」

『……………』

サファイアはなにやら考えてみたいだったが、やがてポケットから何か取り出して私に渡した。

『別に見て回りたいたいなら、そうしてもいいけど、私はこれから委員会に報告に行かなくてはならないから、一緒には行けないわ。』

そのペンダントは、魔石が付いていて、心のなかで行きたい場所を念じれば導いてくれるわ。それを使って昼過ぎまでに委員会本部に来ること。それを約束してちょうだい』

魔石…。

ペンダントを見てみると、加工の施された美しく光る蒼い石が付いている。

「昼過ぎまで、ね。」

わかった！ありがとう」

『あ。これ渡しとくから、何か気になるものがあつたら買いなさいな。』

あと、荷物のほうは私が持って行ってあげる』

そう言ってサファイアは私に見たことのない硬化やお札もくれた。

私は再度お礼を言って、財布にそれらをしまつ。

さてと、それじゃあ観光（及び買い物）に出発ー！

それにしても、素敵なお店がたくさんありすぎて、どこから入ろうか迷うな。

いや、せっかく魔法のある世界に来たんだし、さっきのペンダントみたいな魔法アイテムを見ようかなあ。

そう思いながら歩いていると、いいかんじのアイテムショップを発見した。

看板には「アイテムショップ “玉石混合” 王都本店」と書かれている。

…店の名前が玉石混合って…。店の外観はオシャレなのに。残念すぎる。

「まあ、ネーミングセンスには問題ありだけど、入ってみようかな」

そう呟いて、私はお店のドアを開けて中に入った。

「わあー…」

店内もオシャレで素敵だ。

そして、棚や机にずらりと並んでいるアイテムに目をとられた。

なんていうか、雑貨屋さんみたいだ。

「いらっしゃいませ」

私に気づいた、店員さんがこちらにやってきた。

「本日はお越しいただきまことにありがとうございます。それで、お客様は何をお探でしょうか」

にこやかな営業スマイルを浮かべながら話す姿は、どこの世界でも共通らしい。

「えっと、実は今日、はじめてこっちの世界に来たので、よくわからないんですよね…」

「オススメのアイテムとかありますか？」

マジックアイテムとか、いまいち理解できてないんだよねえ。

とりあえず、最初は店員さんねオススメを聞くのが無難でしょ。

「今日始めていらっしゃったんですか？」

…つまり、お客様の記念すべきはじめてのお買い物か、この【玉石混合】でということですか？」

店員さん、何やら感激した様子。

「少しお待ちください、選りすぐりのオススメ商品をお持ちします
っ！！！」

そう言うと、何やらすっかり張り切った様子の店員さんはお店を縦横無尽に駆け回った。

なんか悪いなあ。

そんなことを考えているうちに、先ほどの店員さんが幾つかアイテムを持ってやってきた。

「お待たせしました。

こちらが当店オススメ商品です！

何から説明いたしましょうか」

「えっと、じゃあ右側から順番にお願いします」

店員さんは私の言葉に、頷いて、3個持ってきた商品の一番右側のアイテムを手に取った。

「これは、“祈りの指輪”といって、魔力を強めてくれる魔石が嵌め込まれています」

次に真ん中のアイテムを手に取る店員さん。

「こちらも、“歡喜の腕輪”といって、魔力を強めてくれます」

最後に左側のアイテムを手に取って、

「これは、“女神の髪飾り”とって、これも魔力を強めてくれる効果があります」

と説明した。

うーん、同じ効果の物を3つ持ってきたことは値段を考慮してなんだろうなあ。

「お値段の方をきかせていただけませんか…?」

「値段は全て、550レイスですね」

レイス、ってのはおそらくお金の単位のことだろう。

ていうか、全て?

「全部、同じ値段なんですか?」

私の疑問に、店員さんは親切に答えてくれた。

「この3つのアイテムは、全て“精霊憑き”のアイテムなんです。“精霊憑き”のアイテムには精霊が宿っていて、持ち主に力を貸してくれるんですが、宿っている精霊が持ち主と認めないと力を発揮しないので、あまり人気がなく比較的安いんですよ」

なるほど。

効果を発揮しない可能性が高ければ、同じ効果を持つ普通のアイテムを買った方がいいってことか。

「ちなみに、精霊が認めたかどうかはどうすればわかるんですか？」

「さあ、そこまではよくわかりません。

最近こちら辺じゃあ“精霊憑き”アイテムを持っている人は少ないですからねえ。うちにある“精霊憑き”アイテムもこの3つだけですし」

店員さんは困ったように言っ て肩を竦めた。

どうしようかなあ、全部同じ効果でしょ？

じーっと、3つのアイテムを見つめてみる。

すると、一瞬、3つのアイテムに付いている宝石が光った気がした。

……、まあ、効果がなくても綺麗だし、アクセサリとして使えばいいか。

よし、決めた。

まとめ買いだ

「じゃあ3つとも買います」

サファイアからもらったお金から、1000レイス札と書かれたお札を二枚とり出して店員さんに言うと、

「3つ全てお買い上げですか？それだと1650レイスなので、350レイスのお釣ですね」

と言われて、商品とお釣をくれた。

そして、それらを受け取って、私はお店を出た。

にしても綺麗だなあ。

こんな素敵なアクセサリーが買えるなんてラッキー

そう思いながら、さっそく買ったばかりのアイテムを身につける。

髪飾りは、バレッタみたいなものだったため、2つに結んでいた髪をほどいてつけようとした。

しかし、ほどいた髪がサファイアから渡されたペンダントに絡まってしまったらしい。

くっつ、面倒だけど、一回ペンダントを外さなくては。

そう思って、ペンダントを外し、絡まりをとって、再びつけようとした、その時、目の前を何かが横切った。

「…て、ペンダントがないっ！」

がばっ、と上を見上げると、鳥っばい生き物がペンダントをくわえて、飛んでいくところではないか。

ていうか、あのペンダントがないと私、委員会の場所とかわかんないんだけど。

知らない土地で迷子、だなんて洒落にならない。

「じっ、その鳥っばいの、待ちなさいっ！」

とりあえず、あの鳥を追いかけるしかないっ（泣）

「はあ、はあ、…じっどじっまっ？」

鳥を追いかけているうちに、いつの間にか森っばいところに入り込んでしまった…。

しかも、肝心の鳥も見失ってしまった…。

結果、迷子どころか遭難してしまっている。

ヤバい、ヤバすぎる…

森に入ってから一度も人に出会ってないってことは、誰かに助けを求めるのは無理そうだ。

とりあえず、森から出ないと。

「でも、どっちから来たかなんてわかんないよ…」

歩き回ってるうちに疲れてきたし、どうしよう…

途方にくれていると、目の前に超巨大な木を発見。

…デカいなあ。

高層ビルみたいな大きさだよ。

根元がちょうどベンチみたいなかんじで座るのに良さそうだし、ちよっと休もうかな。

そう思つて、根元に腰かけた。
ふう、やっと座れたよ。

……、本当にデカイ木だなあ。でも、ちょっと弱ってる？

根拠はないけど、そんな風に感じて、なんとなく木の幹に手を当てて、「パワー注入」とか言ってみた。

うん。

なんか一人でやっているとイタいね。何も変化がなかったなんて、悲しいね。

「そろそろ行くこつ…」

そう呟いて、私はまた歩き始めた。

巨大な木のところで一休みして歩き始めてから一時間はたったと思う。

もうすぐ、お昼だろうなあ。

「お腹すいた…」

はあ、なんかもう限界だあ。私の体力は薄っぺらいんだよ。こんな山のなかを歩き回るなんてもう無理。

そう思って座り込んだ私の耳に、ガサガサっていう、物音が聞こえてきた。

助かった！

なんとなく、そう思ったけど、現実は違ったようだ。

目の前に熊みたいなやつが現れたんだから！！

「ガールルッ」

「ーっ!？」

ヤバい、殺られるっ。

あいつ絶対に私を餌って認識したよっ。

神様、神代弥生の人生は16年で終わってしまっんですか？

そう思った瞬間、

ダメなの、その娘にてを出しちゃダメ

そんな声が聞こえたかと思うと熊はすぐに去っていった。

…へ？

今の声はどこから…

何をキョロキョロしてるの？ここなの

声の主は、すぐ近くの木の枝に腰を掛けていた。

みた感じ、4・5歳くらいの小さな女の子で、髪や瞳はエメラルドグリーンで、見にまってる可愛いワンピースも薄い緑色だ。手には、背丈に不釣り合いな巨大で立派な杖を携えている。

まずは、お礼を言うの。ありがとうです

女の子は木の上から、ペコリと頭を下げる。

「いや、お礼を言わなきゃいけないのは私の方だよ。ありがとう。それに、私はあなたにお礼を言われるようなことしてないし」

慌てて、私も頭を下げる。

なんだかよくわからないけど、この子のおかげで助かったっぽいし。

熊のことなら、お礼はいらないの。それに、弥生のおかげで助かったから、やっぱり、ありがとうは言わないといけないの

女の子は言う。

私のおかげで助かった？

しかも、今、私の名前をいったよね？

私、この子と初対面のはずなんだけど。

この子、何者!？

わたしは、この「霧雨の森」を守護する精霊なの。わたしの霊力の源である、大きな木を弥生が助けてくれたの

女の子はつたない言葉で一生懸命、説明してくれる。

あの木が、ここ数十年ほど、ずうっと元気がなかったせいで、わたしも弱って姿を現すことができなかつたの。でも、弥生がさつき魔力を込めてくれたおかげで、木が元気になって、わたしも出てこ

れたの

「え？さっきの「パワー注入」とかが本当に効いたの？」

マジですか？

しかも精霊って。

だからお礼に、コレをあげるの

そう言っって女の子は翠色と水色の綺麗な石を2つくれた。

これはわたしの力を込めた魔石と、お姉ちゃんの力を込めた魔石
なの

「お姉ちゃん？」

この、「霧雨の森」は樹の力を司るわたしと、霧の力を司るお姉
ちゃんの2人で守っているの

へー。

なんかもう、凄いとしか言えないね。

さすがファンタジーな世界。

「そういえば、森の出口ってどこかわかる？」

弥生が森で迷っているのには気づいたの。だから、お姉ちゃんが、弥生を助けてくれそんな人を呼びにいつてるの

「本当！？

ありがとう」

私が、あの木を救ったのかどうかはわかんないけど、助かったよ。

あと、弥生が追いかけていた鳥からペンダントは取り戻しておいてあげたの

そう言つて、ペンダントも渡してくれた。

ー?????siderー

現在、私は“プロスペリティー王国”と“ファラウェイ王国”をまたがって広がっている、ー霧雨の森ーへと向かっている最中である。

最近の調査で、森の中心部に生えている巨木が弱っていることがわかったからだ。

あの巨木は森を守護している精霊の霊力の源でもあるため、一刻も早く、魔力を込めて元気にしてやらねばならない。

しかし、その巨木が元気になるにはかなりの魔力が必要になってくるため、私に白羽の矢がたったのだった。

一応、私は大陸でも指折りの魔法使いだからな…。

そんなことを考えていると、現在、現れることのできないはずの者が突如、私の目の前に現れた。

セミロングほどの水色の髪に、蒼い瞳の少女。

「霧雨の森―を守護している2人の精霊の姉の方で、水を司る精霊である。」

クロリア、私たちの森に来てほしい

彼女は開口一番にそう言った。

「来てほしいも何も、今、向かっている最中なのだが。…そなた達は現在、現れることが出来ないはずではなかったのか？」

私の言葉に、彼女は意外な返事をした。

弥生っていう女の子が助けてくれた。そして、その弥生は森で迷ってしまっているようなのでクロリアに助けてほしい

…助けた、だと？

精霊2人が霊力の源にしているような木を、助けた？

「その弥生とやらは、どんな者なのだ？そなた達2人を支えている巨木を救うだなんて、そこらの輩には無理なはずだ」

私の問いに、彼女は淡々と答える。しかし、またしてもその答えに驚かされる。

普通の女の子だった。でも、魔力は凄かった…、救うどころか、木は全盛期より生き生きとしてる

全盛期より生き生きだと？

それが本当だとしたら…

森に着くまで、あと僅かだった。

【第2章】

・1日目 素敵、素敵（後書き）

新キャラとか“あっち”の世界の説明は、弥生がサファイアに無事、
巡り会えたら、サファイアがしてくれると思います

m こんな駄文、読んでくださってありがとうございますm（――）

m

1 日目・？ 森を抜けたら…（前書き）

駄文ですが読んでくだされば嬉しいです）
（

1日目・？ 森を抜けたら…

女の子（精霊らしい）のお姉ちゃんやらが、助けを呼びにいつてくれているらしいので私は女の子とお喋りをして待っている時、

弥生、その髪飾りと腕輪と指輪は、もしかして“精霊憑き”なの？

女の子は私が午前中に購入したアイテムを指差して聞いた。

「そつらしいね」

私は肯定する。

他ならぬ精霊である彼女が、気づいたのだから、あの店員さんの言っていたことは本当だったらしい。

むー、なんで姿を現さないの？何か理由があるの？

女の子が不思議そうな顔をする。

そう言われてもねえ、私もわからないよ。

「うーん、私のことを持ち主って認めてないからじゃないかな？」

とりあえず、一番あり得そうなことを言ってみる。

違うと思うの。たぶん、この子達は弥生のことを認めてるの。だから何か他に理由があると思うの

え。

私のことを持ち主として認める？

予想外だ。

でも、なんか嬉しいな。

むー！。クロリアが来たら、その子達のことにも相談してみるの

女の子はそう言つと、何かに気づいたようにピョンっと、木の枝の上に立ち上がって、クロリアが来たのーと言った。

どうやら、助けが来たらしい。助かったー！。

「そなたが弥生か？」

そう言つて、水色の少女と一緒にやって来たのは、すんごい美人だった。

「私は、クロリア・ファラウェイと申すものだ。そなたが、迷っていると聞いたのだが」

そう言うと、クロリアさんはこちらを見た。

というか、物凄く美人なんですけど。

サファイアも、美人だけど、この人に比べたら負けるだろう。

透き通るような白い肌、漆黒の瞳、さらに艶やかな黒髪は腰のあたりまで伸びているのに、枝毛とか痛んでるところが一切なさそうだ。

しかも、スラッとして長身だし、スタイルもいい。

パリコレに出てるモデルにも負けないと思う。

というか、勝てると思う。

深紅のシンプルなパーティードレスが、めっちゃくちゃ似合ってるし。

声も美声！

「あの、そんなに見詰められると困るのだが…」

クロリアさんは少し照れたように言う。

おっと、つい、テンションが上がってしまった。

「すみません、美人だなあって思って、つい」

私の言葉に、少し困った風になると、

「…そなた、もしや、“こちら”に今日やって来たばかりのプログラマー受講者じゃあるまいな？」

と聞いてくる。

うん？

私、なんか言ったかな？

なんでわかったんだろう。

「そうですけど…？」

「ふうむ。そういうことが…、ならばそなたは、魔法使い管理委員会の本部に向かわねばならぬのではないか？」

委員会本部に来て、サファイアは言った気がする。

「えっと、その通り、です」

私がそう言っていると、クロリアさんは、

「そうか。では、私が委員会本部へ連れて行ってやる。ついて来なさい」

と言い、歩き出した。

「えっ？あつ、はい」

私はそう言っ、クロリアさんを見失わないようについていくのが精一杯だった…。

必死にクロリアさんを追うこと約一時間半。

やっと森を抜けられたらしい。

「ふう、ようやく森を抜けれたな。ここからは私の馬車で向かおう」

「え？いいんですか？」

「よいのだ。私が成すべき仕事をそなたが代わりにやってくれたよ
うだしな」

そんなかんじのやりとりの後、クロリアさんの馬車で委員会本部へ
送ってもらうことになった。

それにしても、馬車に乗るなんて初めてだよ。

すげいつ。

そんなことを考えていたら、クロリアさんが、話しかけてきた。

「そういえば、精霊達が、弥生の持っている“精霊憑き”のアイ
テムに宿ってる子達が出てこれない原因を探してほしいの　とか言
っておつたな。見せてくれないか？」

「あ。はい」

私は髪飾り、腕輪、指輪を外してクロリアさんに渡す。

「ふうむ？何やら魔法がかかっているようだな。
待っている、いま解いてやるから」

そう言ってクロリアさんは、その美しい手をアイテムの上に翳す。

「…ん。これで精霊も出てくれるのではないか？」

クロリアさんからアイテムを受け取った瞬間、アイテムが光った。

精霊は出てこなかったけど。

「おそらく、自分達が出てきたら邪魔になると考えたのだろう。まあ、確かに馬車の中で出てこられたら狭くなるからな」

確かに馬車の中なら狭いかも知れないけど、この馬車、かなり広いですよ？

私の心を知ってか知らずか、クロリアさんは、

「初対面は主と自分達だけの時の方がいいと思ったのかもしれないがな」

と付け加えた。

そういうしてるうちに、委員会本部までついたようだ。

クロリアさんも用があると行って、一緒に来てくれた。

「弥生！？」

確かに私は、昼過ぎって言って、具体的な時間は言わなかったけど、

遅すぎじゃないの？

さあ、急いで昇格試験受けに行くわよ』

サファイアとは委員会本部の建物に入ってすぐに会えた。

…すごく怒ってるみたいだけど。

「弥生は別に昇格試験を受ける必要はない」

不意に、私の後ろからやってきたクロリアさんがサファイアに向かって言った。

って、昇格試験を受ける必要がないってなんで？

それに、そんな言い方したらサファイア、たぶん怒りますよ？

『…っ！？クロリア女王様！？』

「えええっ！？女王様！？」

本日一番の驚きでした。

『私の担当する魔法使いがお世話になったようで…』

現在、委員会本部の応接室らしき部屋。

そこには、頭を下げていへりくだっているサファイアの姿があった。

「いや、世話になったのは私の方もだ。故に、そのように頭を下げる必要はない」

クロリアさん、もとい、クロリア女王は、サファイアに言うと、私の方を向いて、

「弥生も、別にかしこまる必要はないぞ。私は出来ればそなたとは友好的な関係でいたいのでな」

とおっしゃった。

そう言ってもらえるのは嬉しいけど…

チラリとサファイアの方を見ると、『本人がそういつてるんだから、そうしなさい』という顔だ。

むう、お許しが出たんだし、いつか。

「えっと、じゃあ、そうさせてもらいます。クロリアさん」

そう私が言つと、クロリアさんは見るものを魅了するような笑顔をこちらに向けた。

やっぱり超美人だ。

『あの、それで、弥生が昇格試験を受けなくてもよいとはどういう意味なんでしょうか』

「どういう意味も、何も、受ける必要がないからだ」
クロリアさんの言葉に、首をかしげるサファイア。

「霧雨の森の巨木が弱っている、という話は知っているか？」

『ええ。確か、森を守護する精霊達が姿を現せなくなっているから早めに手を打たなくてはいけないとか』

サファイアが答えると、

クロリアさんは「ああ」と肯定した。

「…実は、今日私は霧雨の森に行つて、巨木に魔力を込めるつもりだったのだが、向かっている最中に、その姿を現せなくなっているはずの精霊が、私の目の前現れて、言ったのだ。弥生っていう女の子に助けてもらったんだけど、その子が迷子らしいから助けてくれ というようなことをな」

『なっ!?!?』

クロリアさんの話を聞いたサファイアは、驚いたように私を見た。

え？

何かな？

『そんな、あの森の巨木を活性化させるだなんて……』

「活性化どころじゃあないぞ？ 精霊によると、全盛期よりも生き生きしているらしいからな」

『……………』

およ。サファイアが黙っちゃった。

すると、クロリアさんは突然、

「委員長、そろそろ出てこられたらどうですか？」

と言った。

すると

「やれやれ、クロリア様にはお見通しですか」

と言いながら、おじいさんが現れた！

「委員長、どうせ今の話は聞いていたんだろう？」

ならば弥生は昇格試験を受けなくてもよいな?」

クロリアさんは、まるで初めからそこに居ることをはしっていた、
とでもいうような顔で、おじいさんに言う。

何?

魔法で隠れてたんですか?

「もちろん試験なんぞ受けなくても星をあげましょう。でござい
ますかな?」

「?後1つ、2つくらいやつてもいいだろう?」

おじいさんの言葉にクロリアさんが反論。

いや、ていうか、なんでそんなに貰えるんですか?

試験受けてないんですよ?

「むう、仕方ないのお、クロリア様がそうおっしゃるのでしたら
でいかがですか?」

「:仕方ないな。まあ、最初の昇格試験が免除された結果としては
それが妥当だろう」

2人で話を進めていたが、折り合いがいたらしく、私のほうに向
き直った。

「おめでとう。神代弥生、君のランクは今日から じゃ」

「それではな、弥生。また会おう」

クロリアさんはそう言って、帰っていった。

…その後、魔法学校に入る資格やらなんちゃらの説明を受けたり、いろいろ大変だった。

ようやく解放されたのは日がくれてからだだったのだ。

しかも、明日は早速魔法学校に行くとか…。

疲れまくりなんだけど。

今日は委員会本部の建物の中にある空き部屋に泊まってもいいとか。

現在、私はその部屋にいた。

たぶんだけど、委員長さんにクロリアさんが頼んだのだろう。

サファイアが、クロリアさんの話を聞いてから、ずっと何か考えているようだったのが気がかりだなあ。

どうしちゃったんだろう。

そんなことを考えながら布団に横になって、アイテムをつこたままのことに気づく。

外しておかないとな。

そう思って、まずはと、指輪に手を伸ばす。

すると、指輪についている石が光って、精霊が現れた。

…、さすがにもう、これくらいでは驚かないよ？

今日1日で、あれだけビックリ体験をしたらねえ。

しかも、クロリアさんが魔法を解いてくれたから、出てくるかもなあとは薄々思っただけだし。

ついでにと思って、腕輪や髪飾りにも手を伸ばすと、精霊らしき2人が現れる。

まったく、やっと出てくることができましたね

ふん、やっと出てこれたぜ

久しぶりに出てくれましたわ

3人は口を揃えて言う。

なんか、個性がバラバラな上にキャラが濃さそうなやつらだなあ…。

一応、自己紹介をしておきますか。私は“祈りの指輪”に宿る精霊で、風の力を司ってます

最初に自己紹介を始めたのは、指輪から現れた女の子だった。

黄緑色の髪を、ちょこんと、2つに結んでいて、瞳も黄緑色だ。首の回りにモコモコしたのをつけていて、着ているワンピースはバルーンスカートになっている。見たかんじ、小学校2・3年生くらいの女の子。

あたしは“歡喜の腕輪”に宿ってる精霊だ。ちなみに、司ってる力は火だ

次に、中学生くらいの女の子が言った。

こちらは赤というよりは朱色と言った方がふさわしい色の髪を、なんとも言い難い結び方で2つにまとめている…何て言えばいいんだろ。

とにかく、足先に届きそうなくらい長い髪を特殊なまとめ方をしていて、瞳は赤い。格好は、うーん、アラビアンナイトにでてくるお姫様みたいな格好？かな。

私は“女神の髪飾り”に宿ってる精霊で、雷を司っていますわ

最後に言ったのは、私より若干上っぽくみえる、お姉さん。

金髪で、瞳も輝くような黄金色をしていて、髪には緩やかなウエーブがかかっている。見にまわっている衣服は、今までに見た精霊達とは違って、髪や瞳と同じ色で揃えてはいなく、レモンイエローを薄くしたかんじのお嬢様っぽいワンピースを着ている。

…と、まあ、3人の特徴をあげるとしたらこんなもんかな。

「えっと、神代弥生です」

一応、私も自己紹介してみた。

うふふ。森を救ったり、ランク外から試験免除でいきなりになったりと大忙しでしたわね

雷の精霊が、にこやかに微笑みながら言うと、

本当にスゴいですね。まさか1日で5人も精霊を救うなんて。英雄にでもなるつもりですか

風の精霊がそう言って、

本当、本当。にしても助かったぜ。弥生があたし達に触れてくれたから魔法に綻びができたみたいなものだし
火の精霊がいった。

綻び？

うーん、なんか、私、自分じゃ気づいてないうちにいろいろしちゃってるみたいだね。

森の巨木にいたっては、冗談でやったつもりだったし。

私は本当にファンタジーな世界に来ちゃったんだな。

それにしても、風の精霊に火の精霊、雷の精霊ねえ。

呼びにくいな。

「…呼びにくいしさ、呼び名つけちゃっていい？」

呼ぶときに不便だからという理由で、軽い気持ちで提案したのだが、
精霊達は意外にも乗り気らしく、

呼び名？名前をつけとくれんのか？
素敵な名前をよろしくお願いいたしますわ
変な名前にしたら承知しないんだから

とか言った。

…私に期待しないで欲しいんだけど。

そんな、キラキラした目で私を見つめないでっ。

「…風の精霊は、フウカ…で、火の精霊は、レッカ…、雷の精霊は、ライカとか？」

我ながら、ネーミングセンスを疑う名前…。

一応、風化 フウカ。

烈火 レッカ、ライカは前の2つに合わせてみたんだけど…

やっぱり名前を考えるなんて難題、私には無理…。

私自分のセンスのなさに落ち込んでいると、精霊達が声をかけてきた。

へへへ。弥生、ありがとうな
及第点と行ったところですか。まあ、よしとしましょう
うふふ、ありがとうございますわ

…なんか、ありがとうね。

君達、本当に私なんかが持ち主でいいのかい？

いつまでも落ち込んでても暗くなるだけだし、この話題はおいてお
こう。

「それにしても、精霊って女ばかりなの？」

私は、ふと疑問に思ったことを聞いてみる。

森で会った精霊も、2人とともに女の子だったし、ここにいる3人も女
だし。

いえ、別にそういうわけではありませんわよ？

私の疑問に、ライカが答えてくれるようだ。
こちらを向いて、説明を始めた。

宿っているアイテムはそれぞれの精霊の好みのものです。です
から、指輪や腕輪、髪飾りなどの装飾品には女の精霊が宿っている
ことが多いのですわ。逆に、剣や盾、鎧などの武具には男の精霊が
宿っていることが多いですわ

ふーん。

なんか、わかった気がするよ。

ライカ、ありがとうね。

そんなことを考えていると、レツカも口を開く。

弥生、早く寝た方がいいんじゃないのか？

明日は魔法学校に行くんだろ？

ああ、そういえば明日は魔法学校とやらにいくんだったね…。

今日1日で十分、不思議体験したんだけど。

…早めに寝て明日に備えるか。

魔法学校ですか、私、行ったことないんですよね。弥生、私達も連れて行ってくださいね

寝る間に、フウカがそんなことを言ったので、

「わかったよ、連れて行ってあげる。

じゃあ、今日はもう寝るね」

と言って、私は眠りにつくことにしたのだった。

1日目・？ 森を抜けたら…（後書き）

魔法学校…

どうしようかな…

読んでくださってありがとうございますm () m

2日目 はじめまして（前書き）

あー…

お久しぶりです。

駄文しか書かないくせに更新頻度の少ない駄目な作者ですが、読んでくだされば嬉しいです。

2日目 はじめまして

「冗談じゃないです。なんで私達とこの子がチームを組まなくちゃいけないんですか」

そう言つて少女は私を睨み付けた。

それに対して、その隣に立っている少年、少女達は顔を見合わせて困った様子だ。

私だつて、いきなりチームを組めとか言われて驚いてるんだから文句いうなー！つてかんじなんだけど。

ていうか、なんで私がこんな状況にたたされてるんだろう…。

私は自然と今朝、この王立魔法学校 デステイニア学園 訪れたところまで記憶を遡らせていた。

〈今朝〉

委員会本部を出て向かった先は、お城みたいな建物だった。

…これが学校なわけ？

確か金持ちが通う学校って話だったけどさ。

これは想像してたより規模が大きくない？

『それじゃあ私は学園長に話があるから。弥生は、その人に詳しい話を聞いておいてね』

そうサファイアは言っ、学校の入り口（まるで城門みたいだった）で待っていた男性に何か話しかけると一人で学校の中へと去っていく。

「君がサファイアが担当しているプログラム生の神代弥生さんか。僕の名前はエリック・ユークリッド。君の担任教師だ。学園を案内しよう」

サファイアに話しかけられていた男性が私に向かってそんな風に言った。

担任ってことは、おそらく彼、ユークリッドさんはこの学園の教師なんだろう。

外見は…うん。なかなかのイケメンだ。年上に興味はないけど、カッコいいと思う。

というか、こっちの世界に来てから、美形しかみてないなあ。

あ、魔法使い管理委員会の委員長のおじいさんはノーカウントとして。

サファイアでしょ、クロリアさんでしょ、それにユークリッド先生。

…て、まだそんなにこっちの世界の人と知り合っていないだけか。

と、そんなことを考えながら私はユークリッド先生に学園を案内してもらった。

ユークリッド先生は、丁寧に教室を一部屋ずつ説明してくれていたけれど、私の残念な記憶力では覚えきれなかった。

だって、校舎広すぎるんだもん。

まったく、これが校舎だとか信じられない。現代日本の超一流の大企業の社長とかでも、こんな巨大な建造物を所有してはいないんじゃないかな。

かろつじて記憶にのこっているのは、休憩室とか魔法実技室やら喫茶室…など、珍しい名称の教室がたくさんあったことくらいだ。

魔法実技室っていうのは、ともかくとして…休憩室や喫茶室には衝撃をうけた。

カルチャーショック。

お金持ちが通う学校には、学業に関係のない、くつろぎスペースが存在しました！

学校に休憩室とか、喫茶室とかいらなくない？って思うんだけど、

それは私が庶民ということなのだろうか…。

まあ、それはともかく。

一通り、学園内を案内し終わった後は、応接室でサファイアを待つことになった。

高そうなソファに腰掛けるよう、ユークリッド先生に言われて腰を下ろす。

すると、大理石みたいな素材でつくられたテーブルをはさんで私のちょうど正面にユークリッド先生も座った。

「疲れただろう。この学園は無駄に広いからね。まったく、おかげで移動するのも一苦労だ」

やれやれ、といった感じに話すユークリッド先生。

確かに、無駄に広い。

移動教室とか大変だろうなあ。いや、休憩室やら喫茶室まであるんだがら移動するのも便利な仕掛けとかも整備されていたりして。あり得そうな話だ。

そんなことを考えていると、

「サファイアに、君にいろいろ教えてくれって言われたんだけど、どうすればいいんだろうね？ちなみに、サファイアからなんか説明があったかい？」

ユークリッド先生にそんなことを聞かれた。

説明、か。

それは、この学園についての説明についてなのかな。それとも、こ
っちの世界のことについての説明のことかな。

この学園についての説明だったら、一応うけたことはうけたけど、
学園に向かう途中に一気に話されたので、いまいち理解したとは言
いがたい。

もともとサファイアも、こんな急に学園に編入する予定ではなかつ
たようで、かなり慌てて説明していた。

その際、サファイアは学園にまつわることで以外の説明は、時間がな
いから学園で説明してくれるように取り計らうとか言っていた。

サファイアは、必要に応じて私に説明をしてくれるというスタイル
を通してきたため、私にこちらの世界についての知識はないに等し
い。

それは、こちらの世界で生活していくにはかなり厳しい状況なのだ
ろう。

だからそのことをユークリッド先生に話すと、
「時間もあるし、知っておいたほうがいい基本的なことを話してあ
げよう」

と、言ってくれた。

「まずは…、神代さんは自分専用の杖と記録書は持っているかい？」

「いえ、持ってないです。…杖は魔法の補助をするアイテムだとは聞きましたけど、記録書ってなんですか？」

いきなり知らない単語がでてきちゃったよ。

またしてもファンタジーなアイテムの出現？

本当に私ってば、こっちの世界のことを知らないなあ。

そう思って質問した私に先生は、不思議そうな顔をした。

「……………。あれ？サファイアってば、教えてないの？」

「??？」

なにをですか？

「杖と記録書は必需品だよ。特に学園内ではね」

へー。

って、私、持ってないですけど。必需品を。

それって、筆記具を忘れて授業を受けるのと同じようなものなんじゃない？

それに確か、サファイアは魔法使うときに杖や記録書？ってやつを

使ってはいなかったような気が…。

ふと、そう思っただけ口に出してみる。

「そうなんですか？ サファイアが魔法使うときに、杖を使っただのは一回しかありませんけど。記録書とかいうのは使っているところをみたことがないです」

「…なるほど。 サファイアにとっては必要性がないから説明する必要を感じなかったのかもしれない」

するとユークリッド先生は、そんなことを言っただけため息をついた。

「サファイアは…何て言うか、“天才”なんだよね。僕とサファイアは、この学園の卒業生んだけど彼女は名前を学園内に知らない者がいないくらい有名だったよ…」

ふーん。 どうりでサファイアはユークリッド先が仲良さげにみえたわけだ。

知り合いだったのか。

「サファイアってそんなにすごかったんですか…」

「すごかったさ。そもそも学園在籍中に彼女と僕が同じチームに属していたことが不思議なくらいだ」

「チーム？」

「学園の授業の一環として、数人で一組のチームを組んで活動することがあるんだよ。まあ、それについては後で説明しよう。あ、遠慮しないで食べていいからね」

ユークリッド先生は、いつの間にか用意されていた紅茶とお菓子を私にすすめると、話を続けた。

「まずは、記録書についてだけど、記録書はその名前の通り、記録しておくためのものだよ。何を記録するのかというと、『自分が作り出した魔法』を記録する魔法というのは、魔法を発動させる時のイメージが大事だってことは聞いてるかい？」

「はい。聞いてます」

「しかしさ、イメージっていうのはたとえ同じことを思い浮かべてみても、その都度変わるものなんだよ。これでは、同じ魔法は繰り返し使うことができない。それに、状況によっては、上手くイメージ出来ずに魔法が発動しないということもあり得る。もしも、非常に時にそんなことになったら大変だ」

まあ、確かに言われてみればそうだ。

そう考えたら魔法も、一長一短ってかんじ。ハイリスク、ハイリターンみたいなローリターンじゃない分ましかだけ。

「そこで発案されたのが、記録書だ。記録書に魔法を刻み込んで杖

と連結させておけば、短い呪文を唱えるだけで簡単にすばやく、魔法を発動させられるのさ」

「便利ですね。でも、魔法を作り出すのは大変そうです……」

私、蝋燭に火をつけることすらできなかつたし。

漫画やアニメとかも、あんまり見てなかったしな……。

小さいころは、「おじゃマ女どれみ」とか「カードキャプターさくら」とかは見てたけどなあ。（そういう世代なのだ）

けれど、あれはあんまり、こっちの世界での魔法の参考にはならなさそうだし。

こんなことなら、魔法ものを大量に見ておくべきだった！

そんなことを悔いているとユークリッド先生が、そんな私にとっては喜ばしい事を教えてくれた。

「記録された記録書は、本屋にも売られていたりするよ。授業で用いる、教材になっている記録書もある。だから、魔法を自分で作り出すのが面倒な人は、購入した記録書しか使わない人もいるよ。ただ、オリジナルの魔法っていうのは、いろいろ重宝するから自分だけの記録書を持つことをオススメするけどね」

つまり、イメージが上手く出来なくても、記録済みの記録書さえ手にいれれば、簡単に魔法が使えるってこと？

万歳だ。これで魔法学校にいるのに魔法が使えない、という最悪の事態を回避できそうだ

「サファイアがすごいのは、そんな、魔法使いにとっては必需品ともいえる記録書を使わず、呪文も短いのに、魔法の発動が安定して

いるからなんだけどね。おまけに、魔法の発動成功率は驚異の100%ときたら、天才としか言えないよ。だから、神代さんに教えるのを忘れてたんだろう」

「…」

サファイア…。

本当にすごいね。

私なんかの担当者でいいのかな。

そんな風にネガティブになりかけていたとき、

“コンコン”

不意に、ドアがノックされた。

「やっと来たね。入りなさい」

ユークリッド先生は、扉の向こうにいるであろう人物にそう言った。

サファイアかと思ったが、先生の口調からして、違うようだ。

「失礼します」

礼儀正しく、室内に入ってきたのは、私と同年くらいの少女と少

年達だった。

それでもって、みんな揃いも揃って美形だった。

自分が悲しくなる…。

「ご用件はなんでしょうか、ユークリッド先生」

一人の少女が、ユークリッド先生に問うと、ユークリッド先生は私
もびっくりな言葉を彼女に返した。

「用件はね、君達のチームにこの子を加えることになったから、い
ろいろ教えてあげてほしいんだよ」

「チームに加える？」

私と、その女の子の声が見事に重なった。

それで、冒頭に戻るわけだけど、なんていうか、そこまで拒否され
ると、悲しい。

救いがあったとすれば、ユークリッド先生に文句を言っている少女
以外の人達は、困惑しているものの、嫌がってはいないように見え
ることかな。

「…アリス、まずは詳しく話を聞こう。その子も困ってるみたいだ
し」

黙っていた少年の一人が、そんな風に少女に向かって声をかけた。

アリスと呼ばれた少女は、少年に向かって、

「何よ、イリスだったら。私が話も聞かずに文句を言ってるみたいなの言い方をしてっ」

と、悪態をつく。

いやいや、あんた、話も聞かずに文句を言っていましたよ。

というか、よく見たら、アリスという少女とイリスという少年、顔だちがそっくりだけど、双子なのかな。名前も似てるし。

「それで？私達のチームにこの子を加えるとは、どういうことなんですか、ユークリッド先生」

アリスが、先生に訊くと、先生は彼女達と私に説明をはじめた。

「この子は、神代弥生さん。魔法使い管理委員会の主催するプログラムのプログラム生で、明日からこの学園に通うことになっているんだけど、彼女はなにせ昨日、こちらの世界にやって来たばかり。詳しい説明も受けていないみたいだから、君達が教えてあげてほしい」

「プログラム生？昨日やって来たばかり？…ますます意味がわかりません。だいたい、それなら私達のチームじゃなくてもいいと思います」

アリスは、不満あり気だ。

しかし、そんなアリスにユークリッド先生は、

「君達のチームじゃないといけないんだよ…。全員が 以上のレベルの力を持つ君達のチームでないと、ね」

「だから、なんでですか？」

アリスは、含みをもたせたユークリッド先生の言い方に、苛立ちを隠そうともせずに訊く。

私も、先生が言いたいことがいまいちわからないんだけど。

「なんでかって？それは神代さんは昇格試験免除のうえ、ランク外から一気に までのランクアップを果たした、異例中の異例。そしてディステニア学園史上初の特待生だから、だよ」

へ？

なに？

なんか、凄いことになってない？

史上初の特待生？

なんじゃそりゃあ！！

人違いじゃないっすか？

神代弥生は、そんなすごい人物じゃありませんよー。

「なによそれ!?!」

「試験免除で、一気に ……」

「特待生?」

「凄いなえ」

アリスやイリス、それに周りにいた人達も驚いた様子だったけど、一番びっくりなのは私自身だよ。

「それは確かに、私達のチームに加えるよりほかはありませんわね」
ただ、周りが皆、驚いているなかで一人、冷静にそんな言葉を言った少女が存在した。

その、アリスではない少女が私の方を向いて

「ようこそ。ディステニア学園へ。そして私達のチームへ。心より歓迎いたしますわ」

にこやかに微笑んだ。

それは、天使のような微笑みで、私の中から疑問や困惑を吹っ飛ばすほど可憐で愛らしい笑み。

「あ…。よろしくお願いします」

そんな天使の微笑みにやられた私は、つつい、そんなことを口走

ってしまった。

しまったと思った時には、すでに私が彼等のチームに加わることが決定してしまっていた。

これが、これから先、私にとって大切な仲間となる彼等との記念すべき出会いであったとは、私はこのとき少しも気づいていなかったけど。

2日目・？ 歓迎会

現在、チームのメンバー達と私が応接室に残されている。

天使の微笑みを持つ少女の、ようこそ発言の後、ユークリッド先生はサファイアを呼びにいったためだ。

しかし。

「……………」

気まずい……。

非常に気まずい雰囲気だ。

おかしいなあ。高校とか、中学校や小学校では初対面の人でも、気安く話しかけてただけだ。

割りと、誰とでも仲良くなれるタイプだったはずなんだけどなあ。

なのに、なんか気まずい。
そんな風に、私の方からは話しかけることが出来ずにいると、アリスが話しかけてきた。

「…あんた本当に、ランクなの？」

いかにも疑ってます、というようなかんじの訊き方。
さらに、アリスはじろじろと、品定めをするかのように私を見てきた。

うつうつ、なんか視線が痛い。

まるで、遅刻したときにクラスメイト達から浴びる視線みたいだ。

「えっと、神代弥生さん…だったよね？」

アリスの突き刺さるような視線に黙って耐えていると、イリスが話しかけてきてくれた。

「あ…はい。神代弥生、16歳です」

思いの外優しく話しかけてきてくれたイリスに、そう返すと

「16歳って、同い年か。あ、自己紹介がまだだったね。僕の名前はイリス・ディエンデッドっていうんだ。よろしくね」

と、彼も名乗ってくれた。

「ふん。ちなみに私の名前はアリス・ディエンデッドって言って、イリスの双子の姉よ。即刻覚えなさい」

イリスの自己紹介を聞いて、アリスも名乗る。

こうなると、自己紹介タイムってかんじになってきたのか、他の人達も名乗ってくれた。

「私の名前はサラ。サラ・レストリアと申します。どうぞよろしく
お願いしますわ」

と、天使のスマイル少女が。

「俺はロイド・サンセットだ…よろしく」

これは、茶髪の少年が。

「僕の名は、ルイス・グレディア。よろしくね、弥生ちゃん」

そして最後に、金髪の少年が名乗った。

えっと、アリスにイリス、サラにロイド。それにルイスね。

OK。記憶力がない私だけど、今ばっちり覚えたよ。

同じチームのメンバーの名前を忘れていたら大変だからね。

「覚えてくれたようで何よりだよ」

唐突にイリスがまるで心を読んだかのように、そんなことを言ってきた。

…確か、サファイアが前に心を読む魔法が存在するって言ってた気がするけど……まさかね。

イリス、優しそうな感じだし、そんなことしないよね。

そう思って彼の方を伺ってみるとイリスはニコニコと笑って私を見ていた。

うん。

あんなに優しそうなイリスが、私に対して心を読む魔法なんて使っはらないっ。

一応、チームメイトだしねっ。

そう考えて、私の方も笑顔を返す。

すると、イリスの隣に座っていたアリスが質問をしてきた。

「弥生、あんたこっちに来て二日目って本当？」

「えっと、まあ、そうだね」

昨日、こっちの世界に来たから、今日は二日目のはず。

「じゃあ、大陸に存在する国々についても知らないわけ？」

「国々？…うーん、知らない……」

誰も説明してくれなかったし。多分、こちらの世界についての一般常識はほとんどない。

さつきユークリッド先生が説明してくれなかったら、記録書についても知らないままだっただろうしね。

そんな私の言葉を聞いて、アリスは口を開く。

「…ふん、成る程。事情はわかったわ。まあ、知らないことは教科書でも読んでおけば一通りわかるんじゃない？幼稚園児でも知っているような常識からご丁寧に解説してくれてるから。ていうか、一般常識くらい理解してから学園に来てほしかったわね。それと、あんたがどれだけ優秀なのかは知らないけど、調子に乗ったりしないでよね」

アリスから口撃を受けた。
予想外。

あー…、でもそういえばアリス、最初から私を快くは思っていないみたいだった気がする。

まあ、でも、こんなの可愛いもんだね。

なんせ私は、悪魔の化身のような女、秋口璃梨と九年間も腐れ縁で繋がってたんだ。

璃梨の皮肉や悪口を聞き慣れた私は、こんなのは笑って許せるくらいだ。

しかも、表情から察するにアリスはわざと言ったんじゃないかな。

私の反応をみるために。

要するに、私は試されてるってことじゃない？

そう思った私は、アリスに向かってとびきりの笑顔と共に

「ごめんね、常識なくて。言われた通り、教科書を読んでみる。でも、私、馬鹿だから、教科書読んだだけじゃわからないこともあるかもしれない。その時は質問するから教えてね。あと、アリスって呼んでもいいかな？」

そんなことを言った。

アリスにしてみれば私の反応は予想外だったらしく、呆気にとられたような表情をしていたけれど、そんなアリスの横で、イリスやサラ、ロイドにルイス…つまり他のみんな…は、笑い始めた。

「くっ、あははははは！！アリスに…アリスに対してそんな態度をとったのは君が初めてだよ。僕のことイリスって呼んでね」

「うふふっ。これから楽しくなりそうですわ！私の名前もサラと御呼びください。私も、弥生と呼びますから」

「…ふ。お前、面白いから俺のことはロイドと呼んでもいい」

「弥生ちゃん、最高だよっ！僕のことこそ是非ともルイスと呼んでくれ」

どうやら、打ち解けることに成功したらしい。

別に、そこまでウケる要素なんてなかったと思うんだけど…、まあいつか。

あ。アリスが正気に戻ったみたい。

私の方をじとっどと見てる。

あれ？

アリスとはまだ打ち解けてないかんじ？

私の対応、失敗だった？

「……………。特別に、私の高貴な名を呼び捨てにすることを許可してあげるわよ。感謝なさい、弥生」

そう言ったアリスの顔は、先ほどまでの剣呑なものではなく、勝ち気な笑みがうかんでいた。

「ふふふ。素敵な仲間が増えてよかったですね。私は弥生が気に入りました」

応接室から出てすぐに、サラはそんなことを言った。

自己紹介をお互いに済ませた後、ユークリッド先生が弥生の担当者を連れてきたのだが、担当者は“蒼き彗星”の二つ名を持つサファリアという女性だった。

その女性は部屋に入ってくるなり、

『弥生、杖や記録書とかその他いろいろを買いにいくわよ』

と言って、僕達には目もくれずに弥生の手を掴んでいってしまった。

「もっと弥生とお話をしたかったのに残念です…」

サラはさつきからそんなことばかり言って、不満げな様子だが、そんなサラに僕はかなり驚いていた。

サラは純真無垢に見えて意外と好き嫌いが激しいので、出会ってすぐの相手を気に入ることは極めて珍しいことなのだ。

「ふん、大抵の人間は、あの台詞で私に嫌悪するのだけれどね。あの子、やるじゃない」

これはアリスの言葉。

アリスもアリスで、サラに負けず劣らず、好き嫌いが激しいタイプ

なので、彼女達二人に気に入られた弥生は凄と思う。
尊敬の域だ。

「…面白いと思った」

ロイドが呟いた。

そうそう、サラとアリスに気に入られるのも難しいけど、ロイドが僕達以外を仲間として認めるのも珍しいんだ。

そんな厄介な三人に気に入られなければいけないのだから、このチームに新規加入できる者は今まで一人もいなかった。

なのに彼女は、あっさりとチーム入りを果たしたのだった。

本当に、凄いことだと思う。

「いやー、それにしても弥生ちゃんは可愛かったねえ。イリスもそう思うだろう?」

「まあ、可愛かったけど」

ルイスの不躡なそんな質問に対して僕がそう答えると
「笑顔が特に最高だったよね。超可愛かった。すっかり惚れちゃいそうになったよ!」

ルイスは、いつになくテンションが高い様子でそう言った。

…惚れちゃいそうになったって、もう惚れちゃまった後じゃないのか？

確かに、可愛かったけど。

くりっとした大きな瞳に、艶のある黒髪。

そして、邪気のない無垢な笑顔…。

美人というより可愛いというかんじだったな。

……。

まあ、とにかく、みんな弥生のことは気に入ったようだった。

みんなというのはこの僕も含めて。

実は弥生が、昨日こちらに来たばかりだと聞いてから、心を読み取る魔法を発動させた。こちらの世界で育った人間の間では、そういう魔法をかけられないように対策魔法を常時発動させておくのが常識だけど、彼女はそういうことは知らなさそうだったから、もしかしたら魔法が効くかもと思ったのだ。

嘘を憑いたり、悪意を感じたらみんなに伝えようと思ってた。

結果、彼女の心情は手に取るようにわかったわけだが、弥生は嘘など憑いていなかったし、むしろ好い人っぽかった。ていうか、なんか憎めないかんじの性格。

それが、みんなが弥生を気に入った理由の一つであることは間違いないだろうな。

まあ、みんなが弥生を気に入った理由は他にもあると思うけど。

「ふふふ。あの子は、私達の素性を知ったらどのような反応をしてくれるのでしょうか。楽しみですわ」

例えば、リアクションがいちいち面白いとか。

サラが心底楽しそうに笑ったのを見て、僕はそう思った。

弥生自身は気付いてないみたいだけど、言われた言葉にいちいち良いいリアクションを返してくれるので、話しやすい。

「弥生ちゃんなら、普通に接してくれるだろうさ。そんな気がする」

サラの言葉にルイスがそう返した。

まあ、おそらく、弥生ならば普通に接してくれるだろうと僕も思う。

それが、今日、僕らなチームに加わった少女の第一印象だった。

『弥生、杖や記録書とかその他いろいろを買いにいくわよ』

応接室に入ってくるなり、サファイアはそう言うと、私を引っ張り出した。

サラ達は、みんな呆然としてこちらを眺めている。

ていつか、引っ張られてる手首が痛いんだけど。

「サファイア！！痛いよっ」

そんな私の訴えもむなしく、サファイアはどんどん先へ行ってしまう。

good-bye、みんな

また明日。

遠くなっていくチームのメンバー達の顔を見ながら心の中で、そう呟いた。

『さあ、好きな物を選びなさい』

しばらく歩くと、サファイアは一軒のお店に入って、そんな太っ腹な発言をした。

そこは、杖や書物が沢山売っているお店。

入る前に、確認した看板には「メリー学用品店」と書かれていたから、学園生活を送るにあたって必要な物を買おうということなんだろう。

好きな物を選べって言われてもさー、私、何が必要なのかわかんないけど？

「…私、よくわかんないしサファイアが見繕ってよ」「私がそう言つと、サファイアは決まりが悪そうに、」

『あ、あはは。実は私もよくわかんないんだよね。私、アイテムとかは全部、他人に用意してもらったし』
と言ったのだった。

はい？

連れてきておいて、わからない？

もしかして、ここに慌てて私を連れてきたのは、ユークリッド先生に言われたからであって、忘れてたから焦ってる…とかじゃないよね？

ちゃんと、そういう計画たっただよね？

「サファイア…」

『あ。その店員、この子が明日からディステニア学園に通うことになったんだけど、必要な物を一通り選んでくれない？』

誤魔化したよね、今。

わかりやすいなあ。

それから、サファイアは駆け付けた店員さんに、一番性能がいいものを持ってこいって言って、大金を払ってた。

やっぱり、サファイアは金持ちらしい。

いやー、凄いね。

私、札束を生で見るのは初めてだよ。

「魔石などをお持ちでしたら、杖に取り付けることが可能ですが」
店員さんにそう訊かれて、私は霧雨の森の精霊にもらった石を取り出した。

綺麗な翠と水色の石。

サファイアは、それに気づくと驚いた顔をしたが、店員さんに取り付けるように指示してくれた。

こうして、私はついに、自分の杖と記録書をGETした。

「へへへっ」

『気に入ったようで何よりだわ……』

嬉しくて、改めて買ったものを見る。

足元から肩の高さまである、少し大きな杖。

なんだか、嬉しいな。

『そういえば、まだちゃんと弥生に魔法について説明したことなかったわね。初歩的なところで止まったままだったから』

「あー…。うん、そうだね」

『でも、ぶっちゃけると、説明すると長くなるから面倒なのよねー。教科書に大体のってるはずだから、自分で確認してくれる？』

なんとも、無責任な！

あんた私の担当者でしょ？

『学園内の寮の入居手続きは、昼間に済ませたから、寮の弥生の部屋に荷物は運んであるわ…。私は後、弥生の制服の手配とか、その他の手続きを今日中に済ませないといけないのよ』

大変そうだね…。

サファイアってば、かなり疲れた顔をしてるし。

…ん？

待てよ。今、学園の寮に入居とか聞こえた気が…。

「まさか、私、学園の寮に住むの？」

『あれ？言ってなかったかしら。そうよ』

あっさり頷くサファイア。

てか、サファイアってば説明不足すぎだよっ!?

「あら、弥生？」

私がサファイアに文句を言おうと思った時、聞き覚えのある声が聞こえた。

「サラ！」

学園の入り口付近のベンチに腰をかけて、読書をしていたサラが私に気づいて、声をかけてくれたみたいだ。

『知り合いなの？』

「彼女達のチームのメンバーになったの」

不思議そうに尋ねるサファイアに、そう答えると

「はじめまして。サラ・レストリアと申します」

サラはサファイアに名乗った。

『レストリア???って、え?まさか...』

サファイアがなにやら混乱し始めたけど、どうしたんだろう。

一方、サラの方は笑っている。めちやくちゃ楽しそうな笑顔だ。

「ええ。お察しの通り、私はレストリア王国第一王女、サラ・レストリアです」

「王女おー！ー！？」

なんか、昨日も似たようなことがあったなあ。

そう思いながら、私は思わず叫んでしまったのだった。

「この大陸には、全部で8つの国が存在します。ファラウェイ、プロスペリティー、フリジア、エドウカット、レストリア、グレディア、ガンディネス、ディエンデッド。その内の1つ、レストリアが私の両親が治める国なのですわ」

サラは、学園寮を案内しながら、説明してくれた。

「えっと…グレディアにディエンデッドってことは…」

「ルイスはグレディアの皇子、アリスはディエンデッドの王女、イリスは王子ですわ」

うわぁ…。

そうだったんだ…。

ん？

じゃあロイドは？

「ロイドは私の護衛なんです。彼は、我が国の剣術大会で、最年少で優勝した腕前でしてね。私が学園に通うにあたって専属護衛となつたんです」

へー。

ていうか、私、そんな人達に向かって、とんでもない振る舞いを…。

ヤバイ、ヤバイ！

「弥生、お願いがあるのです」

「な、な、何かな？」

パニック状態の私に、サラは上目遣いで見詰めてきた。

わー、睫毛長いっ。瞳うるうるで、可愛いっ。私が男だったら陥落してたよ。

「どうか、私達とは普通に接してほしいのです」

へ？

「い、いいの？敬語使ったりしなくても。名前呼び捨てでも構わな

いの？」

予想外のお願いに、びっくりな私。

「ええ。私達は弥生と仲間で、同年代の友達でいたいんです」

「サラっ！」

がばつと、飛び付いた私にサラはびっくりしたみたいだったが、安心したかのように笑ってくれた。

「弥生なら、そう言ってくださると思ってました…」
「そう？」

「実は、弥生がサファイアさんに連れていかれた後、クロリア姉様から連絡があつたのですわ」

クロリアさん！

そっか、クロリアさんは女王様。
みんなと、知り合いつてことか。

「クロリア姉様には、小さい頃からお世話になっておりますから、クロリア姉様が弥生を知っていたのには皆、驚きました」

「ああ…、ね」

そりゃそうだろうね。

昨日こっちにやって来たばかりの私が、一国の女王様と知り合いだ

なんて。

自分でも驚くわ。

「クロリア姉様は、弥生が私達のチームに入ったと聞いて、「さすが弥生だな。お前達を認めさせるとは…」と、仰られてました」

「認めてくれたの？」

「もちろんですわ。私達の素性を知らないとはいえ、媚びない態度や、アリスの意地悪に笑顔で返す度胸を気に入りました！」

「ありがとう…」

なんか、結果オーライってことですか。

「あ、この部屋のようにすわね」

そう言ってサラは、寮の三階の一室の前で足を止めた。

言う必要はないと思うけど、学園寮は校舎と同様にかなり広い建物だった。

王族が通う学園って考えたら、それも若干納得だけだ。

「弥生、鍵を開けるので杖を出してください」

「？杖？」

疑問を抱きつつ、先ほど買ったばかりの新品の杖を取り出すと、サ

ラは

「それを、ドアの前でかざしてくださいな」

と言っ。

何がなんだかわからないけど、とりあえず言われた通りにしてみると杖の先端が光って、ガチャッと鍵が開く音がした。

「……魔法？」

「細かいことを気にしてはいけませんわ。まあ、強いて言うなら魔法と科学が融合した技術：ですわ。ファラウエイ王国が開発したもののなんですの」

サラはそう言って、ドアを開けた。

「わー、広いし綺麗な部屋っ」

泊まったことないけど、ホテルのスイートルームってこんな感じなんだろうなって思う部屋だった。

「ふふふ。弥生は可愛いですわね。夕食の時間になったら呼びにきますわ。今日はチームに仲間が増えたお祝いをアリスの部屋で行いますから、そのつもりでいてください」

サラは、はしゃぐ私を見てそう言っつと、部屋から立ち去った。

わー、なんか楽しみ。

テンション上がったちゃうなあ

はしゃぐのはいいけど、ちょっとは魔法について勉強するべきじゃないんですか？

いきなり、フウカが現れた。

ちなみに、指輪も腕輪も髪飾りも装着しっぱなしだ。

昨日、フウカが学園に行きたいって言ってたからね。
でも…

「なんで、そんな真面目なことを言うのよ？」

せつかくテンション上がったのに。

いやいや、フウカがいうことも一理あるぜ？ 弥生はまだちゃんと魔法の発動が成功したことないんだろ？

ぴよこつと、腕輪に嵌められた真っ赤な魔石からレツカも現れる。

「偽物の璃梨と戦った時に使えたもん…」

あれは、命の危険に晒されて、本能的に魔法が発動しただけだから、自分の意思で発動出来るようにした方がいいと思うわよ？

ライカまで現れると、そんなことを言った。

「…じゃあ、あんた達が私に教えてよ」

嫌ですよ。自分で教科書でも読んでください

めんどくさいから、やだ

応援してますね

「なっ!」

精霊達は、すぐさま消えてしまった。

くっつ、言いたいこと言うだけで消えやがって…

でも、確かに教科書を読むくらいの方がいいよね。

サラが呼びに来るまで、真面目に勉強しますか。

「魔法とは、大きく分けると二種類に分類される。一つは光。もう一つは闇。

光と闇に分けられた中でも、さらに水、火、風、地、などの属性にわけることができる。

魔法は、イメージさえ出来れば誰にでも使えるが、イメージで発現させることが可能なのは、上記した光、闇、水、火、風、地の6つ

までで、それ以上のものは、理屈が頭のなかで理解できていないと魔法として発動することができない。

例えば、目の前にある建造物を消したいとしよう。

その場合、建物が消えるイメージだけでは魔法は効かない。もっと具体的に、爆破して跡形もなく消えるだとか、風化して建物が崩れて消えるだとか、そういった6つの力を組み合わせたイメージをしなくてはいけないのだ。飛行する魔法はその為風属性となる。

しかし、転移魔法や肉体強化や精神作用等の魔法は、例外とされていて、無属性の魔法となっている。

これらの無属性魔法については、古代の文献でも記述されているため、現在グレディア帝国にて各国の考古学者達が研究中である。無属性魔法については謎が多いため彼らの働きに大いに期待したいところだ。

【よくわかる魔法学】より抜粋―

「意味わからんっ!」

私はそう言つと、教科書を閉じた。

なにが、よくわかる魔法学、だ。わかんないよっ。

何？

私が馬鹿なの？

「弥生…?」

すると、不意に背後から声がかげられた。

振り返ってみると、イリスがいた。

「あれ？なんで、イリスがここに？」

さつきからこの人、ドアをノックしてたのに、弥生が気付かないからあたしが開けてやったんだ！

いつの間にか現れていたレッカが得意気に笑う。

「精霊がいるとは思わなかったからびっくりしたよ……」

イリスが苦笑しながらレッカを見る。

レッカだけじゃないですよ

私もいますわ

すると、フウカとライカまで現れた。

まったく、自己主張の強い奴らなんだから。

「三人も……。弥生って、本当に僕の予想を上回るよね」

「え？そっかな？」

「うん。見てて飽きないよ。……とりあえず、アリスの部屋へ行こう。準備はできたみたいだから」

私は、そんなイリスに連れられて、アリスの部屋へと向かったのだ。
った。

アリスの部屋は五階にあった。ちなみに、アリスの部屋の左隣がサ
ラの部屋となっていて、右隣はイリスの部屋で、その隣はルイスの
部屋、さらに隣がロイドの部屋らしい。

イリスいわく、「権力を使って、みんなの部屋を近くにした」のだ
そうだ。

そして、この階は他の階より豪華な部屋になってるんだとか。

「弥生の部屋も、このフロアに変えてもらおうか？」

と、イリスは言ったけど丁重にお断りしておいた。

あれ以上に豪華な部屋だなんて、贅沢すぎるっ！

そんなやり取りをしているうちにアリスの部屋へ到着。

「いらっしやい。ま、あなたの歓迎会みたいなもんなんだから、楽
しみなさい」

出迎えてくれたアリスは、私の顔を見るや否や、そんなことを言っ
た。

なんか、アリスが優しくなってる気がするんだけど気のせいかな？

そう思っていると、いつの間にやら隣にやって来たルイスが私の疑問を解消してくれた。

「アリスは好き嫌い激しいからねー。嫌いな人間と、どちらでもない人間には冷淡だけど、気に入った人間には甘いから。弥生ちゃんの場合は気に入ったみたいだね！」

「へー…」

「サラも、ああ見えて好き嫌い激しいんだけど、弥生ちゃんは気に入ったみたいだし、ロイドも珍しく弥生ちゃんを仲間って認めてるし、スゴいねー」

「え!？」

あの、公明正大、純真無垢、天真爛漫ってかんじのサラが好き嫌い激しい!？」

あ、でも私のことはなぜだか気に入ってくれた?みたいだし、よかったあ。

それで、ロイドもありがとう。

「いやー、弥生ちゃんて本当にスゴいよ。アリス、サラ、ロイドに歓迎されてることもだけど、あのイリスに受け入れられることが一番スゴいね」

「イリスに?」

イリスは割りと最初から優しそうだったけど。

「イリスってば、優しそうに見えて腹黒いからねー。弥生ちゃんも騙されちゃ駄目だよ？」

ルイスが楽し気に笑いながらそんなことを言っていると、

「おい、ルイス。何余計なことを弥生に吹き込んでるんだ」

イリスがルイスに拳骨を喰らわせた。

うわ、けっこういい音したよ。結構、ダメージ与えたんじゃない？

ルイス、顔がひきつってる…。

「あ、弥生。今ルイスが言ったのは根も葉もないただの出鱈目、戯れ言だから気にしないでね」

「うん…」

にこやかに笑うイリスを見ながら、ルイスの言った通りかもしれないと私は内心想った。

「お前ら、早くしないと食べる物がなくなっちまうぞ」

「食べないんですいたら私が全部いただきますわよ」

ロイドとサラのそんな言葉を聞いて、私は慌てて席に着く。

ルイスとイリスも席に着いたのを確認すると、アリスが言った。

「それでは、我がチームに新しく加わった仲間に乾杯！」

「『『『乾杯』』』」

もちろん、未成年なので、ジュースでの乾杯だけど。

その後の歓迎会の様子はこんなかんじだった。

どんなかんじだったかというと…

「イリスっ、おかわり持ってきて」

「はいはい、只今」

「イリスっ、甘いものが食べたい」

「はいはい、只今」

アリスは、そんなかんじでイリスをこきつかってて、見てるこっちが可哀想に思えてきたので

「イリス…大変そうだね。手伝おうか？」

と、イリスに言ってみただけど、

「弥生っ、だーいすきっ」

いきなり抱きついてきたサラに妨害された。

てか、え？

サラ、大丈夫？キャラ変わりすぎじゃない？

「ちょ、サラ、どうしたの…って、酔ってる!？」

「サラは炭酸で酔う体質なんだ…」

ロイドがため息をつきながらそう言う。

「炭酸で!？」

「ああ…。炭酸に手を出さないようにと見張ってたんだが、いつの間…」

なんか、ロイドも大変そうだね。

「弥生っ。あーそーぼっ」

「サラ、弥生が困ってるだろう。あんまりベタベタするな」

「なによー。ロイドの馬鹿あ」

ロイドによって、酔ったサラから解放された私。

サラの酔いを覚まそうと、ロイドは水を持ってきたりと働いてる。

…あれは、慣れてるな。

さすが専属護衛！

「弥生ちゃん、感心するポイントがなんだかずれてるよ」

この場において、唯一暇そうなルイスが私に向かって苦笑した。

「暇そうになって…。酷いなあ、傷ついちゃうよ？」

「心を読むなっ！！」

その魔法、かなりたちが悪いよ。それにプライバシーの権利つてのが日本では一応保障されてるんだからね。そこら辺、ちゃんと考慮してほしいな。

「それは、弥生ちゃんが対策魔法を使わないからいけないんだよ」

はい？

そんなのがあるの？

「対策魔法つてのを発動させたらかからないの？」

「まっ、教えないけどねー」

「なんでっ！」

性格悪いぞっ！！

「弥生ちゃんが「ルイス様、どうか私に教えて下さい」って言うてくれたら、教えてあげなくもなくなる」

「結局、教えてくれないんじゃない？」

「バレた？」

悪戯っぽく笑うルイス。

なんだろう…このチーム、個性強すぎじゃない？

「弥生ちゃんも十分に個性的だから」

ルイスはまたしても私の心を読んだらしく、そんなことを言うてきたけど、私は普通だよ。

普通の今どきの女子高生。

「…ふーん。そう思ってるんだねー？」

ルイスの言葉は、聞き流すことにしよう。

まあ、とにかく、楽しかったとだけはいえるかな。

明日からの学園生活も、みんながいるんだったら悪くはないかも。

そう思ったりした。

2日目・？ 歓迎会（後書き）

読んでくださりありがとうございます（ ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0299u/>

誰か私に平穩を！！

2011年10月9日06時34分発行